5861
2144
no.9

MATR TO :LA SEMANTO: 1922

種蒔く人

行動と批判

第二年第二巻第六號

大正十年十二月一日（第三種郵便物認可）
大正十一年二月二十六日（印刷納本）
大正十一年三月一日發行（毎月一回一日發行）

BERKELEY
LIBRARY
UNIVERSITY OF
CALIFORNIA

三月號◇

種蒔き社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嘗て人間は神を造つた。今や人間は神を殺した。造られたものゝ運命は知るべきである。

現代に神はゐない。しかも神の變形はいたるところに充滿する。神は殺されるべきである。殺すものは僕たちである。是認するものは敵である。二つの陣營が相對する。この狀態の續く限り人間は人間の敵である。その間に妥協の道はない。然りか否かである。眞理か否かである。

眞理は絕對的である。故に僕たちは他人のいはない眞理をいふ。人間は人間に對して狼である。國土と人種とはその問ふところでない。眞理の光の下に結合と分離とが生ずる。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○　○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○——世界の同志と共に！

種蒔き社

種蒔く人三月號　目次

非愛國主義者の山縣公觀……（題言）

無產階級の藝術としての未來主義の意義……（社論）

無　月（小說）……平戶廉吉

白き指よ、强き瞳よ（詩）……萩原恭次郎

夜の水車（小說）……金子洋文

初七日（小說）……松本弘二

たゝかひのうた（詩）……村中亮

超殺人的惡法に對し世界の同志に訴ふ……種蒔く人

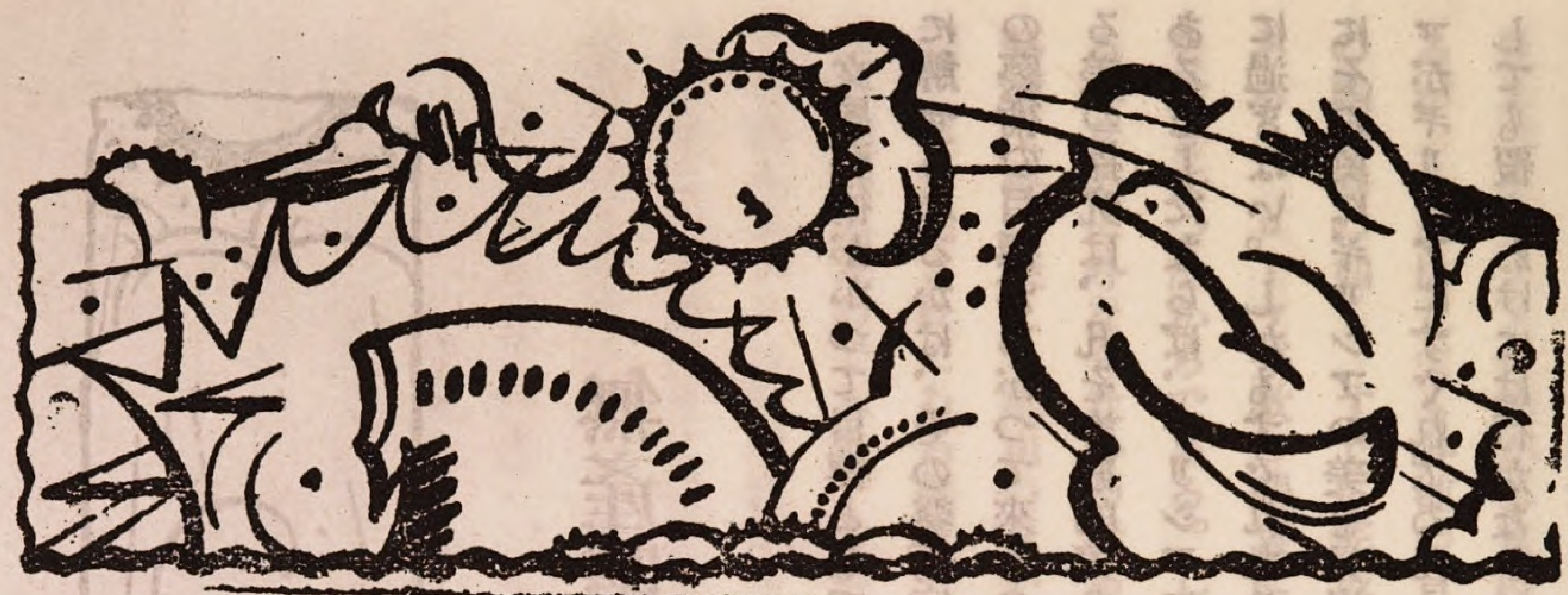
戲曲の創造性と價値（評論）……佐々木孝丸

生きんとする本能（評論）……渡邊順三

□批評——初之輔——正俊——弘二——小牧——洋文——賢三

□世界欄——地方欄——婦人欄——生活——聾人——靜動——後記

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



非愛國主義者の山縣公觀

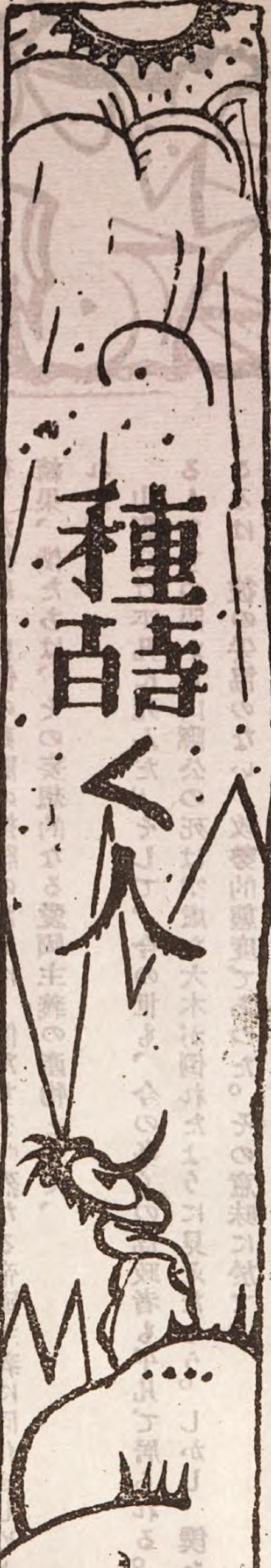
山縣公は平凡に死んだ。山縣が死にさへすれば世の中が變るだらうと思つてゐる人たちが多くあつたのに、世の中は山縣が死んでもいたつて平凡だ。そして、世の中は昔、山縣といふ帝國主義者のあつたことすら忘れて、當分このまゝつゞくであらう。今の世が、今の世を建設した人に對して無頓着なことと、また、今の世そのものに對しても大した感興のないことが、今の世のまゝで生きやうとする人たち自身によつて、はつきり證明された。無關心と云はうか、超越と云はうか。今の社會は死に瀕してゐる。

山縣から觀れば、僕たちは明かに國賊であらう、また、亡國論者であらう。が、しかし、僕たちから觀れば、山縣は死ぬまで邪道を辿つて來た。そして、自個の建設した今の世、また、自個の取卷からまでも見はなされて死んだ。

山縣の主張と僕たちのそれとは相對的に正邪の區別がある。それであるから、山縣の死は僕たちに異樣の感動を與へる。僕たちはおもふ、山縣には終始一貫の主張があつた。そして、それを獨裁的に力行した。結果に於て、かなしきことのあつたにもせよ、彼には頑とした信念があつた。彼の第一歩は革命であつた。だから、彼は何人よりも強く革命の眞理を理解したらう。彼の第一歩は破壞であつた。だから、彼は何人よりも深く破壞の眞理を理解したであらう。そして、革命を斷行し、破壞を實行した彼は、自個の建設の擁護のために、僕たちを熾烈なる帝國主義に同化せしめようとした。その結果、僕たちは、その妄想的なる愛國主義の產物として、
れた。

山縣公は平凡に死んだ。そして、今の世も、今の多くの爲政者も平凡で居られる。今の世に滿足する人たちの眼から山縣公の死は空虚な大木が倒れたように見えたらう。しかし、僕たちの彼に學ぶところは、彼の妥協のない、攻勢的態度であつた。その意味に於て、　は、國家の柱石、議定官樞密院議長大勳位從一位功一級元帥陸軍大將公爵山縣有朋の死を讚美する。

東167809
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



無產階級の藝術としての未來主義の意義

文學藝術がかつて目標として目ざしてゐたところはかの美といふ概念であつた。しかしながらこの概念がいかに現實的に解せられるかは、その藝術家の信ずるところによつて異つて來なければならない。その故に各時代、各主義に應じてその藝術の目標がちがつて來るのである。人はギリシアに於て古代の美の理想を見出すであらう。まことにギリシアに於ける美の探究は、凡そ客觀的美の限りをつくしてゐたのであつた。ギリシア人は好んで調和をいふが、調和が美の究局であるとしたならば、ギリシアに追ひ超す美の創造者はそれ以來決してなかつたのである。ローマ人は單にギリシアの弟子に過ぎない。しかもすぐれたる弟子にあらずして、單なる模倣者に過ぎない。人がローマ文明を驚嘆するとき、人は直ちにその奥にギリシアの美を見出すのに遲れはしないであらう。ローマ人はギリシアをローマに飜譯したのみである。ローマがギリシアにすぐれてゐたとは何人にも考へられないであらう。まことにギリシアの美の理想はローマの威力を以つてしても覆すわけには行かなかつたのである。ローマは然り、中世紀を通じての基督教的文明は如何の狀であつたか。人はそこにいはゆる美の痕跡さへ見出しがたいのに驚くであらう。與へられたるものはたゞ「聖」の理想であり、宗教の價値で

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あつた。ギリシア人が定めたる「美」とは、彼等にとつてはたゞ異端の誘惑に外ならなかつたのである。之を例へば音樂に見よ。ギリシア音樂が事實に於て貧弱であつたことは、ギリシアの他の藝術の優秀なるに比してむしろ怪むべきほどであるが、それにしても各種の音階も構成され、又ユークリッド、ピュタゴラスの如き音樂理論は、ひとしくアリストテレースの論理學の如く、すでに完成されてゐたのである。これらの音階をローマ宗教者はいかに用ゐたのであるか。人は知るであらう、ローマ宗教の悲哀に滿ちてゐることを。これはギリシア音樂からローマ宗教者が特に長音階の如き快濶なるものを除き去つたからである。しかもそれは音樂的理論の上に立つてさう決めたのではない。單にそれが美しくして誘惑的なるがために外ならないのである。この一例でも知れる如く、中世紀の宗教はあらゆる「美」の理想の禁絕を企てた。そこに藝術文學の榮える理由のないことは、特に指摘するまでもない。現に「美」の理想がいかやうに解せられるにしても、その「美」が禁絕されてゐる限り、藝術の目標はないからである。その故にこそかの「人道學者」が中世紀の宗教に對して叛旗をひるがへしたのである。その目標は何であつたか。それは依然として古代ギリシアの美の理想に外ならなかつた。さうしてこのルネサンスの理想が今日そのまゝ繼續されてゐるが故に、今日に於ても「美」の理想が當然ギリシアに在り、さうして事實その立場に立てばギリシアほど完成したる美を創造したものはなかつたのである。その見地に立つとき、古典主義が然るのは無論のことであるが、浪漫主義でさへも、そのギリシアよりの支配を脫することは出來なかつたのである。

しかしながらそれがいつまで正しいのであるか。余等はすでに「美」といふ概念の內容がいかやうにも變じ得ることを知つてゐる。また事實に於て、藝術の目標が美にあるとさへ斷言し得ないやうになつてゐる。それにも係らず、人は結局美を目標とし、藝術の目的を美に定めようとしてゐる。それは單にジエイムズもいへるが如く、習慣の結果であり、また古代崇拜の一結果に外ならない。このギリシアの系統をひける美の理想は、然らば何であるか。

極めて簡單にいへば、いはゆる美とは一の概念に過ぎない。それの實現は、事實が示すのみである。人類生活の祖先なるギリシア人は調和を以つてこれに應じた。さうして人は今日に至るまでギリシア人の理想を模倣しつゝある。元來美とは、あらゆる他の觀念をひとしく、空なるものであつて、實體でない。故にそれが實體は必らず個々の人に應じて變じて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐるべきである。ギリシア人はこの理想をいかにして見出したのであるか。

姑らく古代人について述べよ。古代人の第一の意識は「神」の意識であつた。神とは自己以外の權威であつた。この權威を發明することによつて、古代人はそれの生活を整理してゐた。そこに宗教的理想が起るのである。この理想は生活全體の理想であつて、決して今日の如く、いはゆる宗教的のみに止まるものでなかつた。生活の第一は、古代人にとつては政治であつた。故に祭政一致の境がそこに現出する。さうしてその生活は疑ひもなく觀念的であり、理想的である。理想主義及び觀念論が古代に榮えた原因は正しくそこにある。他の國民はもとより、最も現實的なるギリシア人に於てすらプラトーンの出でたことは、正しくそれの明證でなければならない。この觀念論の基づくところは即ちかの「神」の權威なのである。プラトーンは之を「神」と名づけないかも知れない、しかもその「イデア」が「神」の變形なることは言を用ゐずして明かである。かくして「神」の權威があらゆる古代人の生活の主要動機であつたことは察せられる。

藝術の起原は何であつたか、それはしばしば性慾的起原をもつ。しかしながらこの藝術の性慾的起原は、實はそれの第一の時代なので、いはゞ「前」藝術とも名づくべきものである。いはゆる今日稱するところの「藝術」としての形をとるに至つたのは、正しく「神」から出て來てゐるのである。人は悲劇、喜劇の起原を酒神バッコスの祭に求めるであらう。また日本の仁輪加、盆踊りの類がいかに神から出てゐるかに氣がつくであらう。小說の起原はもとより叙事詩であり、それは神をうたつたものに外ならない。音樂は神にささげるために發生し、繪畫は神殿をかざるためにのみ起り、建築は神殿を建てるためによりよく發達した。然らば藝術の起原が宗教的起原をもつといふことについて異論の生じないのも當然である。性慾的起原もまたそこに結合してゐる。然らば藝術が理想とするところのその美とは、疑ひもなく宗教的意味をもつものでなければならない。ディオニュソス的と、アポローン的と、結局いづれもが宗教的でないと何人がいふのであるか。

しかしながら現實に之を見よ。一國民がより宗教的であるか、より非宗教的であるか、乃至はその宗教がよりいはゆる人間的であるか、よりいはゆる神に近いかは、國民そのものゝ特質と、それの環境の定めるところでなくてはならない。この故に北歐の神話とギリシアの神話といたく異るものであり、またヘブライの神とギリシアの神と相違するところであ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。ギリシア人はむしろ樂天的であり、現世的であり、快樂的である。それは南歐人の特性である。然らばかのルネサンスに於て、ひとしく古代の理想なる宗教的治世の下に於て、人道學者がイタリア人であつたのも不思議はなく、これがヘブライの子なる基督教から脱して、ギリシアの理想のなかのより人間的なのに觀喜したのもまた怪むを須ゐない。そこに人間が宗教的支配、神の權威から脱して、人間それ自身の命を見ようとした努力の迹がうかゞはれるのである。このことは生やさしい努力ではない。これは人間生活に於ける一大變革である。即ち人はそこに至つてはじめて、權威を外に、即ち神に求めることをやめて、自己に求めようとするやうになつたのである。その結果は何であつたか。それは「知る」ことである。さうして「眞理」なのである。「知る」ことがいかにして「科學」となつたかは、それの言語學的解明からも知られるのである。さうして眞理とは正しく科學の子でなければならない。さうしてそこに人間の理想として眞理の大道がひらかれたのである。それが人間生活の動機として、恰も古代に於て神がその位置を占めてゐた如く、今や眞理がそこに座を占めた。即ち古代に於てあらゆる人間生活が神によつて支配されてゐたのが、今やすべての事件は眞理によつて解決されなければならない。之を具體的に見るならば例へば人間の行爲を律する「善」とは何であるか。古代に於てはそれは神に對して善なるものであつた。今やそれは科學から見て正しいことでなければならない。この故に道德もまた科學の支配に歸したのである。

眞理とは科學を通じて得らるゝものである。科學的とは即ち批判的である、これは決して自己をはなれてゐない。自己をはなれて、いかなる傳統もその意義を失ふ。之を之をデカルトに見、之をカントに見、之をフィヒテに見、つひに現代が科學的精神により支配されることを知り、また自己によつて斷ぜらるべきを知るべきである。ベーコンは偶像を批難した。人間は今や一個の自己を有すべきである。さうして自己の批判があらゆる上に下され、而してそこに眞理がひらめくのである。この見地に立つて藝術及美とは如何であるか。

美の理想とはその內容を常に變ずるものである。故にギリシア人の見出したる美は神への美であつた。ギリシア人が他の古代國民よりも比較的人間的であつたことが、それをしてより甚しい過失から脱せしめてゐた。しかもそれが結局神か

ら出てゐるのを否定すべくもない。さうしてそれが古代人にとつて正當ならば、現代に於てそれが他に變じなければならないことは當然であらう。藝術の目標が神に存せずして、眞理にかへることも今や認められなければならないのである。さうしてこの論の推局するところ、文學藝術は常にその時代、時代の意識によつて色づけられなければならないといふことになる。之を小にすれば今日の文學は必然に今日の生活から產出されるものであり、之を大にすれば古代の藝術は古代意識から生れたものといふことが出來る。即ち文學、藝術の如きは、常に生活の第一次に屬せずして、それの第二次的位置をとるからである。然らば現代は如何の狀にあり、さうしてこの現代の藝術はいかになるべきであらうか。

無產階級運動はそれの具體的方向や目的については、各々異る見解があるであらう。しかしながら之をやゝメタフイジカルにいへば、それは生活をして科學化しようとする努力なのである。生活は今日あらゆる科學の應用によつて科學化されてゐるやうに見える。しかしながらこれはたゞさう見えるだけに止まつて、、それの本領に於ては依然として古代の生活である。古代からやゝ一歩ふみ出したといふに過ぎない。何故であるか。多くの哲人はすでに科學の精神を了解した。さうして自己の權威を自己のうちに求めた。しかも生活に於ていはゆる科學はまたもや昔の如き神の如き位置を占めるに至つた。之を科學の神化といふのである。科學は神化した。これ科學の墮落でなくして何であるか。故に國家は墮落し、眞理は墮落した。墮落したる生活を救ふものは再び科學にかへることの外はない。資本主義的生活は、神化したる科學の敎へた生活であつた。この生活に對してのルネサンス運動が正しく無產階級の運動でなければならない。それは墮落したる眞理をもとにかへし、墮落したる科學をもとにもどして、生活をして生活の位置をとらしめることの外の何物も要求しない。その運動に對して藝術がひとしく應じなければならないといふことは、現代に於て正しく至當なことなのである。そこに於て藝術の科學化が要求されなければならない。そこに藝術が生活と直接に手を結ぶやうになるのである。

思ふに藝術の理想としての美が神の理想をとつたままでゐたことは、藝術をして久しく墮落の淵に陷れてゐたのである。自然主義は少くともそれに對する一反抗であつたかも知れない。しかしながら自然主義がよつて以つてとつたところの科學はかの神化したる科學に外ならなかつた。それは神化したる資本主義下に於ける科學を目標としたものであつた。その

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

眞理も結局墮落したる眞理、若しくは神化したる眞理であつた。正しく科學的精神をとるものにとつて自然主義が不滿なのはその點だつたのである。社會生活は少くとも科學的にならうとしてゐる。しかも藝術は依然として神に歸服してゐる。これが現代の藝術否定論の根本的なものである。ここに於て藝術の科學化とは何であるかが同時とならさるを得ない、その題目に對して、余はかの未來主義運動を提示しようといふのである。

未來主義とは今日に於て、單に一時の好奇心の對象となるに止まるものでない。もしも未來主義にして眞に科學のために、眞理のためになすものであるならば、それは生活そのものの救ひ主であり、また第二ルネサンスの萠芽となるものである。極めて大きくいへば未來主義もそれの發生は單に一文人氣のまぐれに過ぎなかつた。それは文學的運動の一つとして見れば、正しく象徵主義の衰弱後象徵主義に對して反動として起つたものである。それだけの意味ならば、未來主義といへども依然として、舊來の藝術の一派であり、古代理想下の藝術に外ならないのである。事實として、マリネツチが初期の數多の宣言を見よ。それは單に象徵主義の反動以外に何等の意義をもつてゐない。しかしながら象徵主義への反動として、表現主義もさうであり、ダダイスムもさうであり、新浪漫主義もナチユリスムも、ボニスムも、フイロプレザンタネイスムもヴイジオナリスムもさうである。故にこれら多くの新しい主義をことごとく未來主義といふ名目の中に投じて、ひとしく反象徵主義とみなしていいのである。ただ問題はそこにない。これらの各主義を統括してそこに「科學」への希望があるならば、これは未來主義を正しく解したものといへるのである。言を反對からいへば、無産階級運動をかく解し、而して之に應ずる藝術として未來主義をかく解すれば、來るべき新藝術の方向も明になるといふのである、さうでない限り、たとひいかに奇をてらつても、未來主義は結局過去主義の一種であることを知らなければならない。さうして無産階級運動と未來主義とをかく解して、生活そのものの眞理が表現されるのである。そこに「美」は正しい「美」としてかがやくであらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

無日

平戸廉吉

―第一―

○「實際僕等はもう飽々してゐるのだ――此平凡な田舍の態は何だ――大根の花が咲いたり直にコヤシの臭のする白い脛のやうな大きな奴が堀られたり――毎日毎日見るともなく見る麥がチョッピリチョビリ伸びて行く――その翌る朝はもう鍬でヒッ掻かれる――畝にはちやんと南瓜(ボウブラ)の花が咲いて待つてゐるといふんだ」

△「たまらないたまらない――傑作には飽々だ――自然の傑作も厭なら人間の傑作も過去つた――○○○だ――傑作に中毒し過ぎた僕等は」

○「セークスピヤでもトルストイでもロツクフエラーでもカーネギーでもワグネルでも大倉でも住友でもロイドでもジョージでもドストエフスキーでもどいつでもこいつでもいやに頭から壓へやがる――自然も其通り粘りづよく黒い土の中でトントン拍子に繁殖しちや人間の速力と競爭する」

△「かまふものかそんなコンヴェンションは捨てて仕舞へ―― Humanité があらうがなからうが季節がちやんと僕等より

一足先に失敬しやうが物質の牢獄は時たま一寸よい事があるが大體に於て困つたものであらうが立派であらうがどうであらうが——熱い熱い——この孟夏の熱沓の中で火花の中で死んで仕舞へ——」

郊外の田圃を歩いてゐた二人の青年は赭岩で切立てた坂道へ出たが首を縮めて帯のやうなエーテルの熱湯を避けやうとした——陽の重たるい黄橙色のカーテンはいらいらしながら○○變電所の煉瓦家根製紙工場染色工場製粉工場顔料製造所……トタン屋根と煙筒の雑多な混亂の中に姿を消した

×

Café—europa ……K子は氷菓子を嘗めてゐる——あなたのそのカーキイもいやならあの異人さんのケンチウも好かないわ——ルパシユカの若い Russe は此方を見た——俺は好きだ素的だと思ふよボタンが眞直につけてあるなダブルの立襟涼しさうだ俺もこさへたいな——およしなさいそんなもの——此處の若いおかみさんは Polonaise か Russe か——編物のひまにチラチラお客の方を見てはノートを附けてゐる——ルパシユカの男が話しだした——藝者が二人這入つて來た

GEISHA-GIRL—Café-europa——面白いと思はない?——つまらないさそんなことそれよりかあの女の顔は素的だ豐饒だまだまだ無數のキツスを欲しさうな顔をしてゐる溜らない Séduction だ」

女の眼は圓い——眼球の中は濃い洋紅で無限大に暈されてゐる——ふとした衝動に驅られたのは何方も同じだ。

PORNOGRAPHIE= Aphrodite=Les chansons de Bilitis=Saikakou=Outamaro=harounobu=toyokuni=pose-academique=pose-seducible=pose-ultra=Bain turc=Secret de Paris+etc=GEISHA-GIRL-JAPONAISE

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

同じだ變りはない春畫のやうな物だと思ひながら——ねそれにしもあの二人づれの女はどれも暑さうだ——いつそ裸でいや夏は木綿の浴衣にかぎるよ黒つぽい奴は駄目だ——まあよけいなお世話樣よとあの人が見てゐます——ふん俺はそれなら敎へてやらう宣傳だあいつらが斯樣な處へ來たがるのもみんなそいつだ——プロパガンダ！ほツ、、、、あなたのお好きな言葉が——また出ましたが宣傳は女の生命であり特に彼等の武器に違ひない彼等自體がそれであつて見れば廣告も宣傳も此處に到つて上乘と言へる——腐心するわけさ——吳服屋が流行り白粉屋が息をつき美顏術屋といふお上の裏帳にも記されてない職業が出來るわけだ——それにしても先天的に間がぬけてゐるな——電車の廣告や待合所路傍のビラと好一對だ——ねあなた煙草を一本下さいな——いつの間にやら隣の椅子にはK大學生の Japan Advertiser と此方を半々に瞥見する眼鏡があつた

マツチを擂つた——ソプラノの序曲で這入つてくる異國人の一隊がある——笑は廣くもない部屋に輝く

——さうだ夏にさらりとした麻か木綿に限る木綿に限るね絹の着物なら秋が一番いい秋の透明な空氣の中では絹の纎維が細く光つてくる身にピタリつく——では夏はどうなの——夏は空氣が鈍くて重くて絹はその中で腐敗するよ——まあ！

——共處で廣告同體の女は立體的効果外光的効果の研究が必要となるのだが不幸にして共直感すらないのを悲しむのだ

——女は夏の帯を捨てた——長居は御無用——　……Au revoir！——……Au revoir！

×

S氏邸——今日はまたフイルムを拜見に來ました——何のこつたいフイルムとは——また例によつて面白いことをたんと承りたいと思つて——ハツハツアまあ上り給へ——主人の無數の毛脛を見ながら階段を上る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ファン！單にシネマのファンであるばかりでなく私は實生活のファンとして否自分もその中のアクタアとして一切をシネマトグラフイクに行きます——へえ！君が活動式に……エラク變つたな——しかし贊成でせう少くともお役所の活動寫眞調査委員(でしたか?の)あなたとしては——フーンさうかね——實のところあなたも大のファンだお役人のやうな四角な顏をして行かれるがうつかり卷き込まれて仕舞はれる——さうでせう？

カリガリ博士はよかつたな素晴しいものだあの舞臺の立體的構造はどんな仕組になつてゐるのかいろいろ研究して見たいと思ふね——それですよ今日私がお尋ねしたのは——その表現派の活動がどうだと——いやそれに限らないのですが私は「映畫藝術」といふ機關紙を持ちたいと思ひます

映畫藝術！なる程面白いだらう——さうです未來の藝術を支配するものはシネマだと云ふ男さへあります——誰だいそんな事云ふな——死んだ立體派の詩人 Guillaume Apollinaire ——ギュイヨーム・アポリネール？ 立體派の畫家論を書いたあれだな——左樣そして Alcools, Le Poëte assassiné, La Rome des Borgia, Les Trois don Juan, etc. の著者

その言葉を多少割引するにしても活動寫眞が與へる影響は幾何でせう——あらゆる藝術はシネマトグラフイクの狀態に進みつつある——といふのは私の今日の獨斷ではあつても明日の獨斷ではないと思ひます——如何——いいと思ふな俺もシネマ黨だがその藝術と云ふ點から見ても何ぢやないか民衆藝術てのはこれだな——そして一つのフイルムが何等の誤譯なく素のまゝで世界中を走るといふ點から見ても上乘ですな——世界的ですよ

の主人は屢々胯掻をひねつて虛空に嘯く——此人は無形の思想を捉へんとしてイメージを探る僻がある——何物を捕へ來つたか——愛すべき汝の天馬——拵りにうそぶく嘯く——微笑むか！

シネマ界の藝術的傾向――これです期待は着々として進みつゝあります――シネマの殿堂が藝術の殿堂となりつゝあるのです。逆に行けば藝術がシネマの影響を受けつゝある間にシネマ其物は洗練され綜合されて來ます――其處に溶け合つたとき始めてアポリネールの予言が實現される譯です――さうだよもうチヤツプリンの時代でもあるまいからな――さうです――ごらんなさい――クオ・ヴアヂスやレ・ミゼラブルやマダム・カメリヤはもう昔の事――アナトール・フランス――ドオデエ――メリメ――ゾラ――メテルリンク――イブセン――トルスイイ――ドストエフスキー――ビヨルソン――ダヌンチオ……からして文壇的傑作は網羅されたではありませんか

然し僕の强調したいのはもつとアクチイブな方面です――例へば佛蘭西のアカデミイ・フランセエズの一人リシユパンは詩人として名高い人で既に無數の傑作もありますが此人は現にシネマ物を作り自らも其當中には活躍するアクターの一人です――翰林院の會員と云ふと老ぼれで黴の匂ばかり嗅いでゐるお爺さんを想像したがるがそれは此方のことでせう――兎に角こんなエライ人もゐるのだし彼方へ行つた人の話によると實に素的ださうです――何でも出演者もコメデ・フランセエズやオデオン等の純藝術家で新進氣鋭な連中が研究的な態度を持つてやつてゐるのがよいと思ひます――ははアそれは素的だ其處へ行つて始めて映畫藝術だな

ところがそればかりぢやないのです――ある新進作家はシネマの中から純粹心理描寫を發掘しやうとしてゐるし――ある人の作品は（活動式小說）と銘があるし――活動寫眞に關する無數の本が出てゐるし――あなたのやうに特種物研究に長じた人はこれに美學を與へんとしてゐます――いや早盛んなものらしいね――獨逸の方も盛でせうな――成しろあんなカリガリのやうないゝのが出來た位だから――さうでせうところで序にあなたはお好きだから參考書を少しお知らせして置きませう――是非私の映畫藝術に贊成して下さい

Luis Delluc: —Cinéma et Cie.

Louis Louis Delluc : Photogénie.

Henri Diamant-Berger : Le Cinéma.

M.A.Zokine :-L'Esthétique du Cinéma.

Albert-Birot :-Cinéma

M.Paul Colin !-Littérature cinematograph-que allemande.

Doris Gunnell !-Le rouge et noir au Cinéma.

此親切な訪問者に對して主人は一杯の麥湯を招じた――T・E－90°＋……の熱騰の中では得難い靈水として此男の喉を滑つて行つた

×

彼は(負傷せる都會)を馳り走つた――何是なら彼は未だ掠奪する術を知らなかつた――彼は訪問記者としてパンの一片を辛じて得ることが出來た――彼は人の心を掘る勞働者――同じく自からの心を掘る勞働者でもあつた――彼は雑多な色彩に沒入しまた浮び上る――日無く螺旋階段を昇降した

民衆の中に交つて彼は走つてゐる――急速度で馳る車の窓から同じく抉り呑噬し貫徹せんとするものに感興した

傷める都會の哀れさ！――君達は何を掘りあてたか？――轍に壞れた道路は振上げる鶴嘴の一撃に猛蕩し鮮血は止みど

なく流れて汗ばんだ土蜘蛛の皮膚にしぶく――何を掘りあてやうとするか――地下深く――間斷なく――地に腹這ふ群

彼は最早以上に觀察を進める餘裕がなかつた

ボウ＝ビヤウラ＝ボヴアアラ―ピリヤウピリウ＝ビエルルル＝ヴエラヴ ヒ ユルラ＝ダダドドニドニ、、、突貫するこの街の鶍鵡が無數の人々を薙ぎ倒し死骸の上を越えて進み進んだ

（この自制力なき猛烈な火の鳥！――何處に衝突せんとする？）

彼は眼を上げた――其處には幾万の人の蠢めくあたり幾万の車馬の熱狂し顚倒し快走するあたり家との押し合ひ摑み合ひ噛み合ふあたり――其頭を踩み潰して急速度の高架電車が飛んでゆく

彼は一瞬にして最も目星しい大厦高樓の瓦壞する音を想像した――走る車輪の相互のマイナスの速さを以て高架電車は大建築の横腹に命中し貫通した

彼の電車は走つてゐる――無數の街々は折れ無數の人家は歪み並木は四散する

彼の心は分裂し絶體の中に昏倒する

氷人――不思議にも其日は昔の春を思はせるやうなオーロラの火が燒えなかつた――（太陽も死人だか！）と人々の慟

哭の聲が聞える——氷はもう永久に水晶の化石となり見る限りは壯大な白宮殿のヴェランダが續いてゐる——木はない草はない綠は更にない——一匹の小鳥も一匹の昆蟲も——地球の遺物といふ遺物はみんな何處へか行つてしまつた——彼等は何を考へ何を爲さうとしてゐる

密造人種が去來する——何物の魔法の中に封じ込められたか——彼等の面影の中にはその先祖を判讀する事は出來ないだらう——平等化され機械化された彼等には既にあらゆる思想が要らなかつた——彼等は燃ゆる五彩の火を見た——其處には何だか行くべき道があるやうな氣がした——總身の血が湧き上つた——見定め難い相が浮んだ——沸騰しながら感覺が彼等を醉はした——彼方へ！彼方へ！

一つの氣力が此一團（グルウプ）に釀され始めた——彼等は或力を感じた——氷原の上には氷の帽子が動いた——ありとあらゆる蜜造人種が總出となつた——Bravo！……

青菫色の閃光の矢！——紅線の雨！——熾な火陷が一度に天空を焦した——人人は口口に不思議な發音を亂射し撓舌し身を踊らせ——アツト叫ぶ間もなく數百万の列は氷原に續いた

動き出した——絶體に自制力を失つた人間が——止まらうとしても止まる事の出來ぬ不定則の運動を始めた

巨大な磁力が彼等を飲んだ

（電車は彼を乘せて走つてゐる）……

（つゞく）

白き指よ　強き瞳よ

萩原恭次郎

何物か我れに笑ひさゞめき
白き指もて
わが額を　まもとに指さすものは
道路を歩みゆくに
我を　盗むが如く靜に指さし嘲る白き指！
物影より　我を凝視する強き瞳！
（あゝ　わが心は一時にさはぐ
うろたへ悲しみ怒る生命の不安！）
斯くして忘れんとする生命の焔をかき起さす勿れ
世に臆しなる猛獸の心に笑ひを與ふる勿れ
我等は咋み　敵を嚙み
また自らの心臓にも歯を通す
おお　我等の怒りより
目に見えざる無限の　眞の飢ゑを呼ばす勿れ
おお　慣らされたる鐵鎖をゆすり切らす勿れ
白き指よ　強き瞳よ
我等を快活によく働かせよ
我等はよく働き樂しまんを願ふものなり
我等は正直なり
我等は莫迦な日本の青年なり
我等は「斯くして」泰平に泰平なり。

夜の水車

金子洋文

一

驛には誰もゐなかつた。チン〳〵と鈴が二つなつて、もし、もしと呼ぶ驛夫の聲が靜かな階調でひゞいて來た。

二人は驛舍を出た。

町には香ばしい黃昏の色が下り染めて、軒々に灯がついてゐた。

湯宿の絆纏をきた若い客引が、聡しさうな顏をしながら、二人の顏をのぞいて行つた、何か言ひたさうであつたが、二人共急に不機嫌な顏をしたので、そのまゝ通り過ぎてしまつた。

二人は何か話したり笑つたりしながら、町を步いて行つた、けれ共無理にさうしてゐたので、反つて、自由な氣持を追ひやつてしまつた。そして後悔と自嘲のまじつた氣持に益々苦しめられてゐた。

二人は愉快な旅の氣分を失はずに無事に都に歸つた仲間のことを思ひ浮べた、そして自分達は何故突然に、淫風で名高いこゝの溫泉に下車する氣になつたのか、理解出來なかつた。

二人は奇怪な妙義山の凹凸を車窓から眺めながら、愴惶と旅裝をまとめにかゝつたその時の氣持を考へ出さうとした。何かしら漠然とした力強い蠱惑、何うしてもふりのけることの出來なかつた幻影（そのくせ二人の心は眞直に都に歸ることを願つてゐた）それは何であつたらう　それは明かに判つてゐるやうで、又、理解しがたいものであつた。

途が、鳥居の前で左右に別れてゐた、一方は湯宿の並んでゐる坂で、一方には小料理屋らしい小さな格子作の家がなら

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

んでゐた。

二人は一寸立どまつて顏を見合せた、が、直ぐに言ひ合はしたやうに、樹木に圍まれてゐる稻荷の境内にはいつて行つた。

境内には大きな樹が鬱蒼と聳えてゐた、鳥居の前に淡ボンヤリした暗い電燈が一つついてゐるだけで、周圍は眞暗であつた。

二人はお互の顏を見ずにゐることが出來た。そして暫くの間無言をつゞけながら、遠くの闇に眼をやつたり、梢の上にある星空を眺めたりした。

冷氣ととけ合つた靜けさが、二人の心にはいつて來た、と同時に、淸々しい自由な心持が、彼等の心の內に蘇生つてきた。

敷石の上を半丁ばかり行くと、小さい社殿があつた、そこへ近づくと、二人は社殿の左側面に强い光線が、樹々をくゞつて反映してゐるのを知つた。

『河があるやうだよ。』と、若い方の北川が、突然低う言つて、光線の流れてくる方に眼を向けた。『あそこに誰かゐる樣だね、行つて話して見よう。』

そこはかなり烈しい斷崖であつた、妙義山の一帶が、奇怪な魅力を以て、暮色の中に咫尺にせまつてゐた。

崖の下は河原の多い細い急流で、水は小石に碎けて滔々と高いひゞきをたてゝゐた。川下の家は溫泉宿であらう、白い湯氣が草叢から河原の方に漂ふてゐる、さわやかな、日本繪によく見る、初夏の眺望であつた。

『三日月が出てゐるね。』水井はすぐ前の石に腰をかけて、何か考へてゐるらしい若者に眼をおとして獨言した『この河は何といふんだらう。』

『これが碓氷川です。』と、突然その男は二人をふりかへつて、優しい眼をあげた『づつと右に見えるのが伊香保の高原です、あの山を越えて行くと草津の方にも行けます。』

眉毛の太い顏色の黑い男であつた、この土地の者としては言葉なり樣子なりが、稍都會に近かつた、絣の着物を着てゐるのを見ると學生のやうにも思はれたが、さう思ふとどつか違つた所もあつた。

北川と水井は不思議な若者とならんで石に腰をかけた。そして土地のことや、妙義山の登山のことなどを質ねた。初めの內、男はひどい吶辯で二人の問に答へてゐたが、次第にその口調に熱が加はつてきた、そして終には故鄕の自然が年々破壞されて行くことを慨嘆したり、町の資本家達が利益のために惡政をほしいまゝにすることや、若者が女の爲に米を盜んだり、繭を外に運んだりすることを、昂奮して語り出した。

『すると君は品行方正ですか。』水井は笑ひながら質ねた。

『いや、私も遊んだことがありますがね。』と如何にも優しい笑みを顏に浮べながら、『而し私は間もなくこの土地を離れたんですよ、今度歸つて來たのは十年振です。』

『それぢや隨分變つてゐたでせう。』

『あそこは綺麗な池でしたよ。』と、男は赤煉瓦の工場の建つてゐるところを指して言つた。

『それが、今ではライオン齒磨の工場となつてゐるんです、あの無細工な煙突を見ると餘りいゝ氣持がしません。』

『君は東京にゐたのですか。』北川は彼の顏に時々浮いてくる子供のやうな微笑に興味を感じながら言つた。

『いや、東京から千五百哩も離れてゐるところです。』

『千五百哩、他處だらう。』

『あつち、こつちです。』

『海員でせう、船の生活をしてゐたのでせう。』

『あたりましたよ。』と黑くやけた顏を撫でながら、彼は又微笑した『私は東京にゐたこともあります、二年ばかり赤坂にゐました、それから船に乘つたんです、田舍は全く駄目です、皆儲けるために人を苦しめてゐるんですからね、私は國に歸つてきて人の心が變つたのに全くおどろきましたよ、私は近いうちに海へ行きます、海は淋しいが腹をたてることがあ

りませんからね。』

話してゐるところに一人の料理屋の女中らしい女が出てきた、兩頰のふくれた、眼の細い、どこかぬけた、人の好ささうな女であつた、額が小さくて髮が少し縮れてゐた。

お湯からあがつたばかりと見えてだらしない形をしてゐたが、肌の白い太つた身體が、何となく魅惑をもつてゐた。

女は三人を斜視して、ずるさうな、いたづらな、人のよい微笑をうかべながら、崖の傍まで近よつた。そして下の流で釣をしてゐる男に聲をかけた。

『信さん、釣れるの。』

聲がとどかないのか、下の男は上の方を振向かなかつた、けれ共、女はそんなことは何うでもいゝと言つた風に、同じことを二度も三度も繰返した。

女は一寸三人を振返つて、又釣をしてゐる男を呼んだ、それから又振返つて、今度はにつこり微笑んで見せた、そしてうつむいて歩き出しながら、小さい聲で面白さうに口笛を吹き初めた。

『何ですか。』水井はよく解つてゐたが、若い男から、昂奮した無邪氣な言葉を引出したかつたので、こんなことを言つた

『あれが湯女です、あんな女に若い奴等がのぼせ上つてゐるんですよ。』

『あの女は何處にゐるんです。』と海員に質ねながら『一寸いゝ女だね。』と、英語で北川にさゝやいた。

『そら、お社の後に料理屋があるでせう、あそこの女ですよ。』と、海員は吐き出すやうな口調で叫んだ『お稻荷さまもくそもあるものか。』

暫くすると女の姿は二人になつた、新らしい方は背の高い顏の細い女であつた、眼が少し釣りあがつてゐるので狐の面の樣な感じがしたが、何處かおど／＼した、まだよごれてゐない女の樣に思はれた、黑つぽい絣の單衣を着てゐた。

二人の女はひそひそ話しながら芝生の上を歩いてゐた、時々笑つたり、大きな聲で『いやね』と叫んだりした。

『今晩は釣する人が少ないのね。』と、やせた背の高い女の方が、優しい聲で少しはなれてゐる太つた女に聲をかけた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『遊びにいらつしやいな』と、三人にとゞくやうな大きな聲で叫んで『釣、停車場の信さんが釣つてゐるわよ。』

『お前の家では酒を飲ませるのかね。』と、水井は笑ひながら、大きな聲で應へた。

『え、飲ませますとも、いらつしやいな。』

『いらつしやいな。』と、細い女の方が、草の上に眼をおとして、力のない低い聲でさゝやいた。

北川は無言で海員の顏を眺めてゐた、彼は優しい微笑を浮べて、水井の顏を見たり、女の方に眼をやつたり、彼等の會話をきいてゐるのが如何にも樂しさうであつた。

間もなく女達は家の中に姿をかくした、そして海員も『もう晩飯ですから』と、いんぎんに二人に挨拶して歸つて行つた。

二

『湯がないのか、湯がなかつたら俺は歸るよ。』北川は二人の女の顏を睨みつけながらどなるやうに叫んだ、彼は半ば冗談で言つてゐた、けれ共、二人の女から受ける苛々した不愉快な氣持を何處かに吐き出さなければならなかつた、彼は東京に歸つた幸な仲間のことを考へた、するとます／＼神經が尖つて行つた、それに室が如何にも汚なかつた。

『馬鹿だな。』と、水井は女に冗談を言ひ／＼眼を向けた『酒でも飲めよ、いゝ酒だよ。』

『酒はいやだお湯にはいらう。』

『お湯はないんですよ、でもすぐ近くにありますから、後で一所に行きませう。』

『俺はいやだ、最初の話と違ふぢやないか、お湯があると言つたからあがつたんだ。』

『本當におこりつぽいのね。』細い顏の女は北川に盃をさして突返へされたので、寂しさうな顏をしてさゝやいた。

『ほつておけよ、まだ坊つちやんなんだからね。』

酒を飲んでゐる內、太つた女の方は如何にも卑しかつた、一人で酒を飲んだり、北川の皿のものに楊子を入れたりした

まづい料理を二枚も三枚も運んできた。

暫くして、細い顏の女は煙草に火をつけて寢轉んでゐる北川に媚を見せようとした、けれ共彼は又もづけんどんに煙草は嫌ひだと言つて、横を向いてしまつた。

『隨分ひどいわ。』と、太つた女は灰に埋めやうとする煙草を自分でとつて吸ひ初めた、やせた女は泣きたさうに眼をうごかした。

水井は一人で酒を飲んでゐた、彼は苦しい戀をもつてゐたので、不快であらうが、何であらうが識別なしに心の空虚を埋めなければならなかつた、彼は一人で唄つたり、女にからかつたりしてゐた。

『この室は夜になると、本當にきれいなんですよ。』と、やせた女は優しい、哀れぽい聲で話し出した『樹の間から釣をしてゐる人の灯がチラ〳〵見えるんですよ、ホラ水車が廻つてゐるでせう。』

彼女は一眼見た時から北川が好きになつた、彼の澄んだ眼や、ひきしまつた唇や、白い皮膚を見てゐると、自分は大變幸福な女のやうに思はれた、今まで自分の身の上について考へてゐたことは、みんな根もない噓であつたやうな氣がした何もかもうれしく何もかも樂しく思はれた。

彼女は早く夜のくることを願つた、そして男に抱かれながら一年以上見ない都の話をきゝたかつた。けれ共、彼女は北川の不機嫌な有樣を見てこの樂しい考へを殆んど棄てなければならなかつた『この人はきつと宿らずに歸るだらう。』さう思ふと、自分がこの世で一番不幸な哀れな女のやうに考へられた。

『昨日も、一昨日も、來てから一年といふもの私は一度も幸福なことはなかつた』

彼女は卑しい汚ない村の若者達を思ひ浮べた、そしてその氣持の惡い憎い若者達に每夜野獸に等しい暴力で犯されてきた悲しい自分を思ひ出した、彼女は聲をたてて泣き出したい衝動を全身にうけた。

『水車が聞えるつて』突然、北川は起上つて耳をそばたてた『あれは每晩廻つてゐるのかい。』

『え、每晩、私初めてこゝに來たときは、あの音がうるさくつて、何うしても眠られなかつたの、でもこの頃はあの音を

ないと、寂しくつて眠られなくなつたわ。」

北川は輕くうなづいて眼を閉ぢた。

ガダン、ガダンと水車は絶えず廻つてゐる、その音にきゝ惚れてゐると、今言つた女の言葉が、悲しいなつかしいものとなつて彼の胸にうつつた。

苛々した感情が次第にひらきかけた、彼は白粉の香ひをかきながら、自分の傍にゐる女が非常になつかしい慕はしいものに思はれた。

『おとめさん、お酒を酌いでくれ。』と、北川はやせた女に優しい眼をおくりながら言葉をかけた。『一寸いゝ酒だね、君の手を出してごらん、僕が今君の幸福を見てやらう。』

北川はさみしく微笑んでゐる女の手をとつて握りしめた、それから女の顔を眺つと見て握りしめた手を眼の近くに引寄せた。

『君は非常に惚れた男がゐるね。』

『又戀愛線が初まつたな。』水井は一寸顔を崩したが、すぐしかめて、『君は氣持の悪い女だね、太つちよ。』

『君の生れは月島と言つたね、惚れてる人は工場へ行つてるんだらう。』

『え、さうよ。』やせた女は一寸手を引込めて顔を赤くした。

『あたつたね、どれ君のは俺が見てやらう。』

水井は盃を卓子の上にひつくりかへして、いやだと言ふ太つた女の手を押へた、そして頓狂な聲で叫んだ『やあ、こいつの戀愛線は大變だよ、まるで性慾きりつしかない、駭いたね、おい北川、こいつのはね、おい、こいつのはね。』

『いやな人ね。』

『私、その人と結婚することが出來るかしら』

『二十五に結婚線が出かゝつてゐるがね』

『二十五』と女は四本の指を折つて見て、

『まだ大變ね』

『おい北川、こいつの線はね大變なんだよ、戀愛線が一本もなくて性慾線ばかりだよ。』

お湯は坂を下りたところにあつた、太い女は外の座敷に行つたので、一所に來たのはやせた女ばかりであつた、水井が湯槽の中から大きな聲で叫んだけれど、女は輕く返事をするだけで、番臺に座つてゐる湯宿の娘と小さい聲で話してゐた。湯は鑛泉であつた、强い硫黄の匂ひをもつた湯氣が、狹い湯殿を閉ぢ込めてゐた。

北川は湯槽にしたりながら、暗い行燈を後に背負つて話し合つてゐる女達を眺めてゐた。

『あの人は手相を見るのよ。』

それが自分のことを話してゐるのだと氣づいたが、自分のいたづらな手相とは少しも交渉のない、一人の女のことを彼は考へつゞけてゐた。

あの女は結婚することは出來まい、そしてこの土地にだつて永くはゐないだらう、すると、彼女は何處へ行くだらう、旅から旅へ、知らない男達に羞しめられながら、流れて行くことだらう、そして終には死ぬのだ。

『では人生とは何を意味してゐるのだ。』

一生涯自分といふものに歸ることが出來ずに死んで行く多數の人々、こんな人生を何うして吾々は是認することが出來るのだ。

それは餘りによく解り過ぎたことであつた、ある醜穢な權力にうづくまつてゐる人生、あらゆる人間の運命はこの權力のために委く蹂躪されてゐるのだ——。

突然、二人の女は晴々と笑ひ出した、それは如何にも無邪氣な、愁のない明るい笑聲であつた。すると、彼は自分の考へてゐたことが、如何にも愚かしい、女の運命とは全く沒交渉なことのやうに思はれて赤くなつた、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『あの女ははいつてこないね。』水井は一人で身體を洗ひながら、ちれつたさうに言つた、

『あの女には戀人がゐるのかね。』

『うん。』

『ハアフか。』

『二十五には結婚線が出てゐるよ。』

三

お湯から歸つたのは十二時過ぎであつた。二人は隣合つてゐる暗い室に休みながら、靜かな言葉で話し合つて居た。

『森の奥にでもゐるやうだね。』と、水井は煙草に火をつけて氣持よささうに吸ひ初めた、

『水車の音が馬鹿にいゝ。』

『あの音を聞いてると、夜の更けて行くのがはつきり感じるね。』

北川はやせた女のことを考へてゐた、彼女の細い頬や、齒並の悪い口元などが面白く思ひ出された、少し前、布團の上から輕くのしかゝつて、

『眠らないで待つて下さい』と、唇をおしつけるやうに言つた、甘い媚なども思ひ出された、その時顔がはつきり見えなかつたので、彼には淸らかな遊びの氣持が動いた、彼は彼女の頸に兩手を卷かうとして躊躇した、それが如何にも不自然に思はれた、彼は動きかけた右手の指で彼女の唇を輕く押へてさゝやいた、

『水車の音がよく聞えるね。』

女は頬で彼の指を拂ひのけた、そして無言で、熱い、キスをすると何も言はずに立つて行つた。

それから二十分ばかり過ぎると、外が急に騷々しくなつた、そして六七人の醉つぱらひの聲が戸口の方から聞えてきた。どや〳〵と男達は家にあがり込んだ、と今まで穴のやうに靜まりかへつてゐた家中が、急にさわめき出して、どなるや

うに叫ぶ太つた女の叱言が、廊下をながれて聞えてきた。

やせた女は室にはいつてきた。

『すみませんが、』と、しほれた聲で『一寸の間ですから、お酒を飲ますとすぐ歸しますから。』

女が出て行くと襖一重を隔てた隣の室に男達はぐわん／＼唄ひながらはいつてきた、そして、荒い亂暴な言葉で、酒を持つてこいとどなつたり、淫猥な話をし初めた。

北川は忽ち暗い不快な氣持に掩ふはれた、少し前取返した靜かな氣持が、全く蹂躙されてしまつた。

『たまらないね。』と、彼は苛々した聲で隣室の水井にさゝやいた。

『大變だ、而し靜かにしてゐよう。』

男達は酒を飲み初めた、わめくやうに唄ひ出した。間もなく帳場に行つてお女將と交渉してきた男が室に歸つてきた

『駄目ですよ』と、太つた女は毒々しい聲で立上つた『こんなに大勢で何うなるもんですか、たつた二人ぢやありませんか。』

『馬鹿言へ……俺はきめて金まで拂つてきたんだ、お前達に文句があるもんか。』

『文句がありますとも、そんなことお前達の勝手になるものか。』女の荒々しい足音が廊下に聞えた。

『畜生ッ、まるで獸だ』

それから暫の間ごた／＼し初めた、太つた女の泣くやうにわめく聲が聞えてきた。

『だつてお女將さん、あんまりぢやありませんか。』

『私いやですわ、そんなこと、そんなこと。』

やせた女のきん／＼通る聲もひゞいてきた。交渉の男は又こつちを立つて行つた。

『しつかり頼むよ。』と、醉つぱらつた聲が彼の足音にあびせかけられた。

『なあに、大丈夫さ、金が拂つてあるんだもの。』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

お女將のなだめすかす優しい聲が低くもれてきた、男の足音が遠くにはなれた。
北川にはこの結果が何うなるか明かに判つてゐた、それを思ふと彼の心は忽ち暗ぐなつた、彼は空想の上ではこれ以上の人生のみじめさも考へてゐたが、現實にぶつかたのはこの時が初めてあつた。
足音は歸つてきた。
彼は床をぬけ出て一刻も早くそこを逃げ出したい氣持にせまられた、彼は急いで兩手で自分の耳を押へつけた。けれ共、それは無駄であつた。
淫慾に燃えた愉快さうな笑聲が、押へた手を貫いてびん／＼ひゞいてきた。
『畜生ッ、獸ッ』と叫ぶ、太つた女の聲もくゞつてきた。
すると、瞬間をおいて彼のたまらない、みじめな氣持が、荒々しいものに變化した、何かを蹂躪するに似た快よい感情が彼の心に燃え上つてきた、彼は耳から手をはなした、そして顔に不自然な笑みを浮べてつぶやいた。
『こりや、面白い。』
少し離れた室から、女の毒々しく呼ぶ聲が聞えてきた、汚ない、荒い言葉を笑ひと一所に表現しながら、一人の男がたつた、五分間たつて男は歸つて來た。
『次は誰だい。』女の聲が絶望に近い荒々しさでひゞいてきた、次の男がたつた。
北川の心は、又、平靜の度を失つた、彼は次第に氣が遠くなるやうな思ひがした、それは餘りにみじめな、恐しい現實であつた、一つの魂がズタ／＼に蹂躙られてゐる——彼は一切が呪はしくなつた、今は男を憎惡する感情よりも、男の獸慾を片けることの出來ない、女の卑屈さが一層けがらはしい呪はしいものとなつた。
彼ば何もかも憎んだ、人間の一切を、制度を、ブルジュアを、自分自身を——
以前よりも荒々しい感情が暴風のやうに再び彼の心に捲き起つた、彼は眼を開いて、そのたまらない、人間同志の蹂躪し合ふ音響を一つも見逃すまいとした、凱歌に似た氣持が勃然として起つてきた。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『おい水井。』と、彼は叫んだ『俺は愉快だよ、血が踊るほど、非常に愉快だよ。』

『うん、だまつてゐろ。』水井の聲は何となく嚴肅味を帶びてゐた。北川は心の中でどなつた。

『土百姓、獸物ッ、淫賣婦・毒婦、皆くたばつてしまへ。』

一時間は經た、男達はさも滿足のやうに笑ひながら歸つて行つた。

『又いらつしやい。』と、お女將と太つた女の聲が聞えてきた。

暴風が去つた後のやうな深かい靜けさが襲つてきた、戶をしめる音が物さみしくひゞいてきた、北川は一刻もそこにゐたまらなかつた。

あんな奴等と褥を一所にしてたまるものか。

『おい水井、俺は歸りたいよ、俺は歸るよ。』

『馬鹿ッ。』と水井は優しく、寂しい言葉で押へた。

『だつて誰があんな奴等と一所になるものか。』

二人は默つてゐた、北川は水井の心に今どんなものが動いてゐるか知りたいと思つた。

『馬鹿つて、、何う意味だらう!』

けれ共・その言葉は彼には理解出來なかつた。

『何うでもいゝ、俺は俺だ、あんな女と、誰があんな女と……俺はうんと罵しつてやる・畜生と叫んでやる、手もふれさせない。』

時計が二時をうつた。

周圍にはくひ入るやうな靜寂が迫つてゐた、その靜さが、淡暗い室にも、彼の心にもくひ入つてきた。

北川は眼を閉じた、彼は浪立つ自分の感情を押へて、何かをきかうとした。

『あゝ、水車が廻つてゐる……。』

ゴウ、、、とうなつてゐる川の流れ、その流れを縫ふやうに、水車は正しい階調で廻つてゐた。その音は川の底から、森の奥から、山から、天から、地から、一切のものにふれ一切のものをくゞつてひゞいてくるやうであつた。そしてその音律には限りない憂ひがひそんでゐた。

、、シンとした、不思議なものが彼の心をながれた、彼の心は次第にその音にひきづられて行つた、何かしらその音は彼の魂に嚴肅な言葉をさゝやいてゐるやうに思はれた。

彼は眠つと耳をそばたてた、一心にきゝほれた、すると、その水車が、次第〱に大きな形となつて彼の眼に映じた、暗い川、暗い森、暗い山、暗い天地、その中に端然とめぐつてゐる大きな水車、それは恰も神の姿のやうに彼の心にうつつてきた。

彼の心は全く靜けさにかへり、嚴肅になり、優しくなつて行つた、彼はやせた女を思ひ浮べた、悲しい女の一生を考へた、すると　彼の眼にはあつい涙が限りなくあふれてきた、彼は女の幻影を抱きしめて祈る様な氣持でさゝやいた。

『俺は何も言ふまい、そして彼女が來たら、無言で手をとつてやらう。』　（二一、四、七）

初七日

松本弘二

一

コツ、コツ、コツ、コツ、……ドン、チヤン、バラン……

コツ、コツ、コツ、コツ、……ドン、チヤン、バラン……

南無妙法蓮華經、……南無妙法蓮華經、……

百疊敷の大廣間の本床の方に叔母の位牌と、墨繪の肖像とを飾つて、片方の飾床と普通の時には花瓶を置く板床の方か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら廊下まで一面に、方々から贈られた花環と造花とで飾られてゐる。參詣人が、次の間までも詰め込んで、聲もなく讀經の聲を聞いてゐる。だが、大きな電燈の光りのために、初七日の晩としては、濕めやかといふよりも、嚴肅ではあるが耀いてさへゐるやうに思はれる。

木魚、銅鈸子の音が間斷なく續く。晋一が風呂から出て、其處に行つた頃には、もうその讀經や木魚や銅鈸子が始つてゐて、それ等の音聲が一番先に彼の耳に響いた。晋一は一家一門の人達が塊つてゐる、床に近い右寄りの方に割り込んだ。其處には、祝ひの時や、悲しみの時のみ顏を見せるやうな人達が、幾人も幾人も塊つてゐた。勿論、晋一も數年振りで、併も電報で呼び寄せられて、遽かに歸國したし、歸國したその日が初七日の法會を營む當の晩であつたので、十日頃大抵は手紙のやりとりもしないで失敬してゐる。――だから、あれも生きてゐるかこの人も達者なのか、といふやうな顏振れが多いのである。その一部分は、夕方一緒にお寺詣ゐりをした時に挨拶をし代した連中だつたので、晋一はその側に座ることにした。偶然にも、彼は――晋一が東京へ、殆んど喧嘩同樣な形ちで叔母の家を飛び出したが、その以前、晋一の方が氣があつたとか、女の方が氣があつたとか、其處いら中で多少噂になつてゐた、叔父方の親類の女で、今は世間で八ケ間敷く、又當然さうであるべきである軍備縮少の餘波を受けたものか、婿に來る時までは驚いた評判だつたさうだが、さうなつて見れば海軍大佐までなつてから婿養子に來るやうな馬鹿男！と言へぬでもない、そして、愈々結婚式を擧げると十日目に待命になつた男の嫁になつてゐる康子が、晋一の側に座つてゐる。お互が一寸挨拶をした。それから彼は、餘りに大仰な初七日の形式や、幾年振りかで歸國して、その頃のことを思ひ起したり、厭な人達や懷かしい人達に、一時に會つた胸一杯の心持を抱きながら、叔母の肖像の方を見つめてゐた。それは全く、順序を立てゝ話しも出來ない、急激な、複雜な、又數多い事件や生活の思ひ出である。顧て微笑むこともある、赤面することもある。

そんな思ひ出に包まれながら、晝間の一事件をまで思ひ出して、晋一は坊主達の座つてゐる方に視線を向け直した。その人數の多いのに一寸驚いた。一い、二う、三い、四お――その都度頭を水滴（みつたま）の點々として落ちる時のやうに調子づかして二十二まで數えた。まあ、よくも集つたものだと思つた。寢物語りに、――彼はその朝三時の夜行で歸國した。――今一

人の叔母の方の從弟達から聞くと、葬式の時には、坊主の數ばかりがもつと大變だつたといふことであつた。身延の總本山や、〇〇尼公の代理や、池上の本門寺等から、九州まで會葬に來たと聞いた。晋一は驚ろきの心を瞠つた。それは、或る皮肉な驚ろきではあるが、既成の宗教が段々權門宗教となり、形式、外觀、空虛、遊戲――そんな、遊びごとになりつつある邪道の一面を見たからに外ならない。それにしても、叔母だけの立場から見れば彼女は幸福者で、いゝ時に死んだものだと思つた。これから都合よく十年も十五年も生きてゐたら、――今は五十七で、未だそれまで生きられぬ歳でもないのだから、――さうしたら、人の世の本統の悲劇にぶつつからねばならなかつたかも知れない。その悲劇は、晋一などの考へ方から見れば、叔父や叔母、其處いらに並みゐる親類の人達には悲劇であつたにしろ、廣い目から、もつと大仰に言ふなら人類全體の上から見て、多くの人々が幸福になるための悲劇である。そのためには、親類一門の悲劇位ゐは、眼をつぶつて、涙と共に笑つてゐなければならないだらう。否、現在だつて、三番目の息子は叔父叔母の眼前の愛の犧牲になつて、青年時代ののび／＼と發達すべき芽も伸びずに、狂人となつて終つてゐるではないか。――全く、叔母は一般世間からは集められるだけの人氣を集め、死んでは惜まれ、S市で一番といふべき盛大な、賑かな葬式をして貰つたといふことであるが、內面に觸れたいろ／＼の心の悲みにも接しないで他界したのであらうか。今はかうして哀惜の念に耐へないやうにして集つてゐる、半數の叔父方の親類達は、斷へ間のないお家騷動の敵であつた。狂人の兄で、叔母の實家の名義をついで、叔父方の女を嫁にしてゐる愼太郎はサイノロで、叔母の眼から見たならば齒痒ゆい程であつたに相違ない。其他、愼太郎の嫁の妹で、晋一との噂のあつた海軍士官の嫁の姉を嫁にするべく決定してゐた、愼太郎の直の弟は、牛馬鹿のやうな女にひつかゝつて未だに苦勞してゐる。一番下の弟は放蕩で一時勘當になつた。大した働らきはないが、實直で一番賴みになりさうな晋一は、今は全く離れて、それも四年前に家の制度改革が容れられないで東京へ去つたきり、そればかりか今は彼等の考へからして見れば人非人とでも思はれさうな、社會主義運動をしてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

コツ、コツ、コツ、コツ、……ドン、チヤン、バラン……
コツ、コツ、コツ、コツ、……ドン、チヤン、バラン……

生前の巧徳は、衆生一港の敬慕の的となりて……

長い讀經、木魚、銅鈸子が續く。晋一はなほも叔母の思ひ出や、今後の家のことなどで心がいつぱいになつてゐた。

叔母は全く幸福な時に死んで行つた。眞の悲劇を見ずに死んで行つた。それにしても、後に殘つた叔父や、愼太郎達の苦しみ方は何うだ。晋一自身にしてもが、今一人母とも思つてゐる叔母はあるのだが、子供の時からの習慣で、『叔母さん』とは呼ばずに、『お母アさん』と呼んでゐた。それだけ親しんでゐた。それぱかりではなく、彼の兩親が死んで、兄が死んで、天にも地にもたつた一人となると、餘計に叔母達が慕はれたのであるが、その苦しい思ひの下から、叔母は人々から慕はれて、たつた一週間といふ短い病床にゐただけで死んだ幸福者であると思はないではゐられなかつた。

その朝晋一が床を出てから、始めて叔母の位牌の前に詣ゐりに廣間へ行くと、愼太郎と彼の嫁の芳子と、其他五六の近親の者達が、晩の準備をしてゐた。一人の坊主が、芳子と何彼と打合はせをしてゐたが、晋一が愼太郎のゐる火鉢の前に座ると間もなく、頓狂な笑ひ聲が起つて、皆が腹を抱へ出した。晋一も可笑しくなつて、坊主達の方を振りかへると、

『生臭さ坊主達をずうツと此處いらへ横に座らして、お客様を四列には、あつははは……』坊主もこれぢや臺なしですね。』

坊主が芳子の方に向つて、右手で芳子がやつたやうに、ずうツと一劃を描いて眞似をしながら、左の手でつる〳〵の頭を掻いてゐる。で、又どつと笑ひ聲が起つた。芳子は芳子で、

『これは失禮、……つい心にありますとね。』

それから、少しは當惑したらしく苦笑し出した。笑ひ聲が止まると、愼太郎がだまつてゐる晋一に

『東京の方は何うかね、この頃は何うも人心惡化で、俺達もびく〳〵するのう。』と言ひ出したのである。『一體、世の中は何うなつて行くものだらうか？』

一體、愼太郎は晋一よりも十も歲上であるのだが、それに叔母はお目附といつた格で、仕事の方は愼太郎夫妻に委して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自分達は隠宅の方に引つ込んでゐたのであるが、家を愼太郎が支配してからは金放れが汚くて、不規則で、それに叔父叔母が家を起した頃とは時代も違つてをり、人間の苦勞にも徹しないし、未だにぼんち氣取りなので、周圍の人々は皆迷惑をしてゐた。のみならず、そんなことは別にしてもが、雇人關係、營業關係、とかいふことは一つの營業團體を形造つて行く上から、尤も考へねばならぬことに相違なかつた。愼太郎が叔父の直轄である米穀仲買店の方へ行くと、晋一が芳子を助けて料理屋の方をすることになつた。そんな具合で、一家の人達は、株式仲買店や、魚會社、其他叔父の會社などに配られて、用心深く堅められやうとした。そのうちでも、晋一の方のは人事關係、殊に女や客相手の仕事であり、荒くれた料理人や、そればかりでなく世の中の裏ばかりを見せられてゐる商賣とて、一番困難であつた。

その時、晋一は叔母の部屋へ行つて、度々料理屋を廢業することをすゝめた。が、それは許されなかつた。暫らくしてから、今度は改革の第一歩として、――それは何うせ小刀細工に相違なかつたけれども、具體的な成案を作つて、内部の改革を申出た。

一、料理人、女中、其他の月給を上ること、

一、定給日を決行すること、

一、帳場の人員を増すこと、

そんな、小さなことを、晋一の若い考へからはまだ〳〵幾多足りないことがあつたのだが、兎に角或る程度までの改良は出來るものとの自信があつたので、細々と十數ケ條も紙に書いて相談したのであつた。晋一自身にしてもが、朝は大抵九時十時から、夜は一時二時まで皆と一緒に働らく。暮の十一月十二月などは、婚禮などが多くて、徹夜するやうなことが度々あつた。それも小人數なら兎に角、料理人、藝妓、上女中、臺所女中、抱車夫、出物方、裁縫部屋、風呂炊き、御飯炊きの爺やなど、百人を越した人々が、同じ家の中でごた〳〵と不規則に、而も毎日忙しく立働いてゐるので、整理がつかないで困つて終ふのである。――が、その手始めの改革案も愼太郎一人の反對の爲めに、遂にお流れとなつて終つた。

晋一が東京へ去つたのは、それから間もなくしてからである。

そんなことで、愼太郎と晋一との中は、すつかり斷絕して終つてゐたのである。今、叔母の死といふ非常な場合で、二人の間には、何等の墻壁をも置かなくなつてゐるのではあるが、晋一の頭には、彼のその第一番の話が腹立たしく、三つ兒の魂は百まで――といつたやうな腹立たしさが、突嗟の間に湧き出て來て、つい皮肉な返事をしなければならなくなつて來たのである。

『人心の惡化は、寧ろ當然ぢやないでせうか。』

それで、折角の話が斷たれて終つた。

『普通選擧でも通過したらば何うかねえ？』それでも、愼太郎は暫らくすると、話の緒口を見出したやうに話し始めた『憲政會や、國民黨は何うしてゐるのかね。尾崎も島田も、武富も何うしてゐるのかね？』

『…………。』

『時に、お前の繪が上野の展覽會に入選したといふので、此方では大評判だよ。……展覽會に當選したなら、社會主義は止めたつていゝだらう。一時はお前、刑事が身元調べに來て困つた。お前の評判が惡くてのう。……もう近頃は來ないが、あんなものは止めてくれただらうね。』

晋一は、彼の話が其處まで來ると、寧ろ他愛なくつて笑ひ出して終つた。

『さあ、……何うだか。』

そんな空氣の中に歸つて來た晋一であるから、糸のもつれのやうに、次から次へとこんがらかつて考へ出される思ひ出は、讀經の聲や、人々の顏を見聞きしてゐる間でも、斷える間はなかつた。いよ〳〵燒香の時が來た。叔父が起つた。それからその次が起つた。晋一の番になると、愼太郎兄弟が後を向いて、彼に眼つきで指圖をした。晋一は、葬式の日の燒香で、此方がた向ふ方の人々で、燒香の順爭ひがあつたと聞いてゐたので、今の場合も亦下らぬことに、常に權力爭ひをしてゐる人達が如何なる醜態を演ずるものか、輕微な皮肉の眼で待つてゐたのであるが、考へ直して見ると今は素直な心持でゐるのが當然で、強いて人々の心の影を見るのもと思つて立ち上つた。寺詣りから晩の法會まで、脊廣服で押しとほ

して來た心持までが、さう思ひついて見れば、餘りに出來過ぎたやうにも考へられた。

三

讀經も燒香も濟んで、愈々お膳が出ることになつた。坊主達を正座にして、招待客を中に、内々の人が一番下座の方へ座つた。百五六十人もの人數で、廣間からはみ出す程であつた。

晋一が座つたところは、中の列の方で、上座の斜めに見えるところに、大小の坊主達　右の斜めの方に叔父達が座つてゐた。僧侶席の方には、日頃から見憶えの坊主達が三四人居た。上座に近くもと九州での日蓮宗管長で、今は東京にゐる明、――それはその頃、上流の門徒を集めて、毎月料理屋で會を開いた。だから、今では彼のは料理屋説教といふ口さがない人々の綽名をうけてゐたし、叔父達の間でさへ氣受のよくない管長であつた。それから少し離れて、三四席下座の方に、宗教とは關係のない私立大學を出て、餘儀なく自家の寺を相續してゐる若い坊主がゐた。それは酒を呑むので有名だつた。何かといふと、『……盤若湯はいゝもんですな。私のは小笠原流で、澤山召上ることが好きでしてな……』と言ふのである。

晋一は坊主達の方を一瞥すると、その間が給仕の女中達で斷たれたのを幸ひとして、向きを自分の正面に變へた。が、疊五六枚を間にして彼と斜めに向き合つてゐる、淋しさうな叔父の面影や、狂人の義雄のことなどが氣にかゝつて、何時とはなしにその方を眺めてゐたりするのであつた。義雄の病氣が最も非道いときには、客に出したならば十人前もとれてそれで切り屑は潮煮の足しにでもなりさうな鯛を、一人で燒いていゝ加減に中の方だけ食べて、ビールを三四本呑んで、客の來る玄關の側に寢轉んでゐたその頃の面影、財産を早く讓つてくれといつては叔父や叔母にせがむで、その後では『死ね！早く死ね！』さう言つて足蹴にしてゐたのだが、今ではでつぷり太つて、人並みにきちんと座つてゐる。

義雄が慾の狂人となるまでには、他に原因もあつたには相違ないが、可なりに本質的なところもあると思つてゐたので、晋一は上京する頃迄も彼の病氣は全快の見込みがないと思つてゐた。だから、これまでにでもなつてゐて、叔母がいよ〳〵

死んで終ふと、滂々と涙を流してゐたといふのが意地らしかつた。それよりも不思議なことは、お金といふこと以外に考へてゐたことのなかつた義雄が、この頃になつて、いろ〳〵の本を讀むやうになつてゐたことであつた。お寺詣ゐりをする途中で、義雄は突然晋一に言ひ出したのである。二人は、一行から少し離れて、下を俯くやうにして話しながら歩いた。

『賀川豊彦だとか、倉田百三だとか、餘りに評判だものだから讀んでみたが、僕は好かなかつた。江原小彌太の「新約」も讀んだが……』

『そんなら、君は芥川や菊地などのが好きなんだらう。それとも宇野浩二か？』

『いや、上手いとは思ふが、讀んでみてから考へるところがないな。ぴんと胸に來るものがないな。』

『それでは、島田清次郎かな？』

『晋さん、……僕を以前のやうな氣狂ひだと思つて、揶揄ふのはお止しなさい。この頃は僕の頭だつて、馬鹿にはなりませんよ。僕は今のところ日本の文壇でなら、武者小路さんを一番尊敬しますね。だけども、此頃僕は一種の疑ひを武者小路さんに持つてゐますよ。それは武者小路さんを疑ふといふ意味でなしに、氏そのもの〻考へ方にですね。……ところで、マルクス全集も讀んでみたが、僕には六ヶ敷くて分らなかつた。』

『…………』

『それから僕が今一番不安に思つてゐるのは、かう社會問題が八ヶ間敷くなつて來ちや、一體何うなるだらうかと思ふんですがね。……若し世の中がひつくりかへりでもしたら、僕等は何うなるんでせうね？』

『その時は、君なんかも人並みに働らくまでさ。親爺の脛を噛ぢつて、握り睾丸で遊んでゐるよりか、その方が何れだけい〻か分りやしない。』

そんな話をしながら、餘り遠くない寺までぼつ〳〵と歩いて行つた。

その義雄の側に、叔父が痩せこけた顔に沈み勝ちな表情を浮べて座つてゐる。愼太郎が續いて義雄と反對の隣りに座つてゐる。少し離れて、海軍大佐が髯を撫でながら座つてゐる。大佐の側に康子が座つてゐて、晋一と彼女との視線が、何

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かの機會に打ちつかると、慌てゝ外らして終ふ。

一とほりお酒が廻つて、臺引が出揃ふ頃になると、もうぽつ〳〵と客達は座を起ち始めた。その機會に晋一も起ち上つた。今度は二度目のお膳の準備をしなければならなかつた。今迄給仕をした女中達や藝妓達、料理人、車夫、仲買店の人々、等々——入れ替つて座に就いて、今度は主人側の人達が酒を運んだり、お膳を運んだりしなければならなかつた。晋一はその前にと思つて、十四五杯ばかりの酒に、何時になく多少ふらついてゐる身體を引き緊めながら、便所へ行くことにした。用便を濟してから出かゝつた時に、偶然入れ違ひに這入つて來たものがあつた。それは、今は大佐夫人の康子であつた。

『私、貴方が此方へ來たらしかつたので、こつそり跟いて來ましたの。』康子は、餘り元氣ではなささうに言つた。『私、とう〳〵あんな禿げ頭を養子にしなけりやならないやうになつちやつて……』

實際、大佐の頭は綺麗に、圓滿に禿げてゐた。

『だつて、大變幸福だつていふ噂ですよ。』

晋一は、康子の心持が大抵分つてゐたので、それだけ言ふともなく皮肉な言葉を出すと、ふら〳〵と又廣間の方へ歩き出した。もう大部分の客はゐなかつた。殘つてゐるものは、殆んど身内のものばかりと言つてよかつた。次のお膳が、鞘の間の方から運ばれてゐた。愼太郎や芳子なども、何時になくお膳をかゝへて下げたり、新たに運んだりしてゐた。晋一が始めの膳を運んで、廣間の方へ行きかけた時に、義雄が臺引の包を提げて、沈み勝ちに廣間を出て來た。

『義雄さん、何を愚圖々々してゐるんだい。』晋一は、先づさう言ひ始めた。『今度は僕等がお給仕ぢやないか。そんなものは、早く彼方へやつちまつて、お膳でも運ばないかね。』

『やり度いけど。』義雄はなほも沈み勝ちに『何だか悲しくなつて來た。僕は部屋へ歸つて、思ふ存分泣いてやるんだ。……

……晋さん、僕悲しくなつて來た。』

『馬鹿だねえ。』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

晉一は仕方もなくお膳を床近くの方へ運んだ。其處には、三四人の坊主達が未だ殘つてゐて、立上らうとしてゐるのを康子が切りに止めてゐた。孰れも、汽車から歸るか、五里もある山道を歸るかの人達で、泊らねば今夜のうちには歸れない人達であつた。山城前管長、それに盤若湯好みの若和尚もその中に這入つてゐた。若和尚は始めから起つ意志はなかつたらしく、女中にお酌をさして、甘味さうにちびり〳〵呑んでゐた。――芳子の言葉が利いて、三四人の坊主達は、二度のお膳にまで座つてゐることになつた。

お膳が出て總つて、今度は二列に人々は座についた。晉一達は、今度はお酌をした。愼太郎夫妻で坊主達の方はやつてゐるので、晉一は料理人達の方へ座つた。其處には、十幾年もゐる古馴染の人達や、新たに大阪から來たり、博多から來たりしてゐる新顏の人達がゐた。

『晉一さん、お久し振りです。』

板場の助一が懷しさうに、四年前とは大分太つた顏を微笑に包みながら、だがその次の調子そつくりで言ひかける。その次の、向板の安吉も、煮方の富吉、――晉一がゐる頃一緒に働らいてゐた人達が、懷しさうに話しかける。盃を貰つて廻つて、再び助一と安吉との前へ來ると、助一は待つてゐたやうな顏つきで、

『あの頃は、私達も盛んなものだつたんですが、この頃は至極品行方正ですよ。』そして、盃を晉一の前へ差出して、……

『あの頃は遊びに行つては、晉一さんに內密金を作つて頂いてさ。……お困りだつたでせうな。はは……』

その頃、助一にも安吉にも遊廓に馴染の女が居つて、時々逢ひに行つてゐた。ところが、何うした機會からか脫線して費用が嵩むと、晉一へこつそり電話をかけて來た。

『昨年からやつと月給も上つて、定休日も出來ました。……この頃は、あの頃と違つて、皆が結束してをりますから、仕事がやりよう御座いまさあ。』

助一は言はず語りに、その頃の思ひ出話を始めたが、話がはずむで來ると、女中頭のお鶴などまでが這入り込んで來て話した。十分、二十分、――半時間、今度のは水入らずのごた〳〵話で、晉一も外の方へ行く機會を見失つてゐると、突

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然、晋一の背後の方から喧騒な人の聲が聞え始めた。晋一は重ねた盃に、顔を紅くし、足元まで多少ひよろ〳〵させながら、その聲の方を向いた。

それは坊主達の方であつた。女達が集つて、前管長と大學出の若和尚との方を取巻いてゐる。二人共中ば立ち上つてゐる。前管長の方が、本統に腹立つてゐるらしく、忿怒の色を滿面に顯してゐる。若和尚の方は、顔に冷笑を浮べて、先程からの續きらしく喋つてゐる。女達の『まあ〳〵』が、少しも耳に這入らないらしい。

『……たま〳〵大金持の家で盤若湯を御馳走になる位ゐがなんだ。生意氣に止めるない。一體今晩の態たらくは何だい。何十人といふ坊主を刈り集めて。こんな權門におもねるやうなことばかりやるから、段々僕等までが評判を惡くするぢやありませんか。管長は先程、僕を破門すると仰つたが、何うか破門して貰ひませう。いゝ幸だ。料理屋説教の管長様と、僕等の考へ方は大分違ひまさあ。大體、宗教で人を救はうなんて過去の夢でさあ。ちつともこの世の中はよくならないぢやないか。……フン。』

醉つてゐるのと、激してゐるのとで、ところ〳〵文句が分らないところがあるが、若和尚は吐き出すやうにさう言つてゐる。相手は段々苦々敷さうに、兩肩を聳えさして、右手を前に出して、さりとてそれで打ちのめすのでもなく、只躍氣となつて力むでゐた。愼太郎と芳子とは、その時はその座にゐなかつた。

晋一は、ほろ醉ひの、多少ぼんやりした氣持でそれを見てゐたが、何だかその光景が滅多にないことなので微笑むでゐた。そればかりでなく、何うにか若和尚の方に味方してやり度いやうな氣にさへなつてゐた。が、進んで何うしやうといふ氣にもなれず、女達も止めにかゝつたが、中ば面白半分に見てゐるらしく、ちつともはか〴〵しく解決しない。――だが、始めの間面白かつた晋一も、段々馬鹿々々敷くなつて來ると、今度は自分がいら〳〵して來た。いきなり前の方にのめり出ると、

『馬鹿！』

と怒鳴りながら、眉を立てゝ、兩方の襟頸を掴むと、二人のつる〳〵と光つた頭を、『がちん』と力委せに打ちつけて總

つたのであつた。

『もう一つ、……もう一度、……今度でお終ひ……』

晋一は、さう怒鳴つてから襟頸を離した時には、何うやら自分の氣持まで變になつてゐて、ひよろ〳〵と後へのめつてどつと轉げて終つたのであつた。

――十一、二、四――

ダントン劇上演

種蒔き社は前號に豫告した通り、愈この三月三日神田青年會館で文藝講演會を開き、同時にロマンロランのダントン劇を上演することにした。上演者は社中同人が全部出演する。顧問に秋雨雀氏、舞臺監督は佐々木孝丸が之を擔任する。詳細は別項の廣告で知られたい。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たゝかひのうた

村中 亮

胸の氷嚢もその間に入れ換へる、
赤兒のミルクも過めなければならない。
併しその時はきまつて冷えてゐる。
温めようとすれば火鉢の火も消えかゝつてゐる。
何といふ忙しさだらう。
やがて夜が明けると、
赤兒に湯を浴せなければならない。
オムツの始末も仕なければならない。
その間に妻には藥をすゝめ、
食事も整へてやらねばならない、
そして又赤兒にもミルクをやる。
目が廻るとは此事だらう。
手はシツキリなしに痛む、
兩方の手に幾所もの垢切れが刻まれ、
とう／＼足にもやつて來た。
もう引つ込んでもよさそうな運命の手。
併しなか／＼去りそうもない。
妻は産後の經過わるく、
隨分長いこと床にゐる。
たゞ床にゐるならまだしも、
熱が四十度を越して昇つたりするので、
幾度も醫師を迎えに行つた。
醫師と云つても半里や一里ならいゝが、
谷間を縫つて二里も行かなければならない。
何といふミヂメな現狀だらう。
三度目に醫師が來た時にはもう、
ハツキリ此世のものとは言ひきれなかつた。
幾通かの電報は夜の中に打つて貰ふ事にした。
赤兒は時をおいては泣く、
氷嚢は取り換へねばならない。

歩き出す毎には痛みも覺えるが、
やがて歩き續けては其の痛みも忘れ、
驅け廻るやうに、
用事が續けざまに出て來る。
何と云ふ悲慘さだらう。

雪は三尺も土をおほつてゐる、
表の硝子窓は終日厚い氷が附いてゐる、
まるで磨硝子以上に白く、
併かも陽光は終日當りもしない、
全く地下室のそれの如うに。
たゞ音づれるものは、
窓をゆすつて行く雪混りの風ばかりだ。

やがて便器をよせたり、
それを洗滌したり、
それから時には來訪者に應接したり、
俺には晝も夜もない。
全く闘ひそのものゝ中に身をおくのだ、
もう幾日も寢衣に着換へてゆつくりと寢た事はない、
蒲團を敷いてゴロリと側に打つ伏して、
しばしばまどろむばかりだ。

今度はそれでも眠らせて與れるかと思ふと、
すぐ赤兒がなく、
泣くと授乳の用意。
もういゝと思ふ間もなく、
今年三つになる子がうめき出す、
オシッコだ、
それにつれて二人の姉達もグズグズ言ふ。
續いて妻の驗溫の時がくる。
それが一ケ月も續いた後には、
もうすつかり不眠になれて、
今度は赤兒が泣くのを待つて、
靜まり次第にペンをとる。
もう三年越し書き續けてゐるものを、
早く脫稿したいとあせりもする。
併し人生のつかれに參りきらない、
これでもか、とネヂ伏せられる運命の手に、

(七行抹消)

變に恐ろしい勢で內から湧く、
もう何でも來い、
準備は出來た。一九二二、一、二九、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

戲曲の創造性と價値

佐々木孝丸

早稻田文學二月號は、若月紫蘭氏の『石田三成の死』といふ戲曲を載せてゐる。そしてこの戲曲が、自分にこの一文を書かせる直接の動機を作つて呉れた。實は右の戲曲を讀んで、例の通り批評欄の一隅を塡める積りでゐたのだが、最初の臺辭を三つ四つ讀むと、呆れ返つて、如何にしても終りまで讀み續けるだけの蠻勇を奮ひ起すことが出來なかつた。然るに何氣なく頁をからめくりしてゆくと、戲曲の終りの所に、『作者附記』なるものがあつた。そして、『私は俳優も舞臺裝置者も凡て創造者でなければならぬと信ずる。――だから私が特に要求する以外の俳優の科については、此作に於ても餘り多くを記さず、とくに云ひ悪い様な臺詞も之をよりよき効果の出るものと變へることを妨げない。云々』といふことが『附記』されてあつた。自分はこの附記を讀んで、戲曲の最初を讀んだ時よりも以上に啞然としたのだ。そしてこの一文を書く氣になつたのだ。斷つておくが、以下云はんとするところは、自分が平常から考へてゐるところであつて、今偶々若月氏のこの附記が、自分に物を云ふ直接の動機を作つて呉れこそすれ、必ずしも若月氏一人に當らうとするものではない。

若月氏の右の附記の意味は、分り易く平易に解釋すれば、『舞臺裝置も科も臺辭も、お好きなやうに變へて頂いて一向差し支えありませんから、どうぞ御上演下さいますよう』といふことになる。苟くも一個の作家として、これ以上不見識な言葉があらうか！　然も現在の日本の戲曲家の中に、この若月氏を嗤ひ得るものが幾人あらうぞ！

戲曲といふものが、苟めにも藝術の一分野に存在の權利を主張し得るものである以上、固よりそれに創造性が無ければならないのは當然である。創造なき藝術は藝術でない。創造力無き藝術家は藝術家でない。而して俳優も舞臺裝置者も獨立した一個の藝術家である以上、それが創造力を持つてゐなければならないのは自明の理である。然るに、茲で考へねば

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ならないことは、俳優の創造力と、舞臺裝置者の創造力とを、作家の創造力とごつちやにしてはならないことである。例を音樂に借りるならば、演奏者は、作曲者によつて與へられた曲譜を演奏するに當つて、その譜の內容を變へることは出來ない。これは作曲者の領域を冒すものである。演奏者はその創造力、獨創力を、與へられた曲譜の圈內に於てこれを自由に發揮することが出來るのである。それの出來ないものは音樂家ではない。藝術家ではない。等しくベートフェンのソナタを演奏するにしても、甲の演奏者と乙の演奏者との間には——この兩者が眞の藝術家であるならば——全く與へられた曲譜の同一圈內に在るにも拘らず、その表現の上に幾多の差違があることは、何人も認めるところであらう。これをしも、演奏者の獨創性と謂ひ創造力と呼ぶのである。

今、戯曲演出の場合に於ける俳優、舞臺裝置者と作者との關係も、全くこの音樂の場合と同じである。舞臺裝置は姑くをく。（これとても、舞臺說明の最も簡單なラシーヌやコルネイユの劇を上演する場合にも、ピルスの宮殿とあるのをオレストの宮殿のやうに裝置することは出來ないし、オラース家の廣間とあるのを、キュリアス家の廣間のやうにしつらへることも出來ないので、唯、斯ういふ場合には舞臺裝置者が、より多く、より自由に自己の創造力を驅使し得るだけであつて、然もその創造力の驅使も作者によつて與へられた戯曲の圈外に出ることは出來ない。）

戯曲の大部分の生命は、それがパントミームでない限り、臺辭に懸つてゐる。戯曲上演に當つて、作者がその臺辭を自由に變へても良いなど〻云ふのは、既に自己が一個の藝術家でないことを厚顔に表明するばかりでなく、それを演出する俳優をも侮辱するものである。

若月氏の場合には、『自由に變へても良い』といふのではなく、『よりよき効果の出るものと變へることを妨げない』といふのであるが、苟も作家として一篇の戯曲を製作する以上、何故『これ以上よき効果の出る臺辭は他にない』といふ點にまで至らないのであるか。何故『よりよき効果の出る』臺辭を他に豫測したま〻で筆を擱くのであるか。頗る情けない話である。作家として自己侮慢である。『どんなに變へても良いから上演して下さい』といふ意味に解釋されても致し方あるまい。が自分は今茲でこの若月氏一人を責めるのではない。作家として、若月氏の如き陋劣な卑屈な考へを抱いてゐるも

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のは、自分の觀るところを以てすれば、他に幾人あるか知れない。然もその多くのものが、いはゆる『新劇運動』を標榜してゐる御歷々であるから益々呆れ返へる。その遣り口を見てゐると、噴飯に耐えぬものばかりであるが、自分を噴飯させる理由を概括して二つに別けることが出來る。

第一に、彼等は口を開けば現在の劇團にロクなものゝないことを歎じ、俳優及び劇場を根本的に改革せざる限り新劇運動の無効であることを主張してゐる。

第二に、根本的改革を施さねばならない俳優及び劇場をそのまゝにしておいて、彼等は自己の作品を『どんなに直ほしたり變へたりしても良いからどうぞ御上演下さいますよう』とひたすら嘆願に及んでゐる。

第一の理由を以つて自分が噴飯する所以は、彼等が唯徒らに俳優及び劇場の革新を叫ぶばかりで、如何にすればその革新が出來るかに心付かないことである。手つ取り早く云へば、劇壇の革命といふことも――それが社會の一角に存在する以上――やはり社會革命の一部門であるといふことに心付かないことである。つまり、現在の社會に生きてゐながら、現在の社會に生きてゐることを忘れてゐるのである。土地を耕やさずして、種子の發芽せざるを憂ふるにも等しい愚かなことである。そして『社會劇』と銘打つたものをシヤア／＼として書いてゐるのである。

だが彼等は、兎も角も現在の俳優及び劇場を革新しなければ駄目だといふことだけは知つてゐる。言ひ變へれば現在の俳優及び劇場に不滿を抱いてゐる。然るにその革新しなければならない不滿な俳優や劇場に向つて、自己の作品を『どうぞどんなに直しても變へても良いから上演して下さい』と嘆願に及ぶ。これ噴飯せざるを得ない第二の理由である。そして玆から戯曲の價値の問題が生じて來る。

戯曲の價値判斷といふことに就いては、從來屢々繰り返へされた所であるし、人それ／＼の意見を持つてゐることであらうが、大體『戯曲は唯讀んだゞけでどもその價値を判斷し得るものである』と云ふのと、『戯曲の價値はそれが上演されて後初めて分るものである』といふのとの二種に大別することが出來ると思ふ。

前者を主張するものはいはゆる『レーゼドラマ』の容認者であり、後者を主張するものは『レーゼドラマ』を認めないもの

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

である。玆で、考へて見なければならないのは、レーゼドラマとは如何なるものであるか、仰々、レーゼドラマと稱するものが存在し得るものであるか、といふことであるが、自分に云はせればこのことは頗る簡單にケリがつく。レーゼドラマとは、『今日の日本の劇壇(作家を含ます)』といふハンデイキヤツプを附けたときにのみ存在し得るものであつて、絕對的な意味に於ては存在し得ないものである。手短かにこれを說明すれば、今日の日本の俳優及び劇場は不完全極まるものである。そのことは、さつきも云つた通り、今日の大多數の戲曲作家が認めてゐる所である。そこで、この不完全極まる俳優や劇場では到底上演することが出來ないものであつても、絕對に上演不可能といふのではなく、戲曲そのもの丶本質としては些しも非難すべき點のないものである場合、今日の日本では、唯それを讀んで見るより外に仕方がない。そして謂ふならばそれに『レーゼドラマ』の名を冠しても敢えて差し支えない筈である。が、『現在の日本の劇壇』といふものをハンデイキヤツプに入れないで、絕對的な意味で、恰もそれ一個の獨立した分野を持つてゐるかの如く『これはレーゼドラマとして書いたのである。』とか、又は、『これはレーゼドラマとして優れたものである』とかいふやうな主張並びに批評は意味をなさない。これ今日の愚劣な負け惜み作家及び總花批評家の誤まれる主張であり批評である。

然らば、今日『戲曲の價値は上演されて後初めて分るものである』との主張は正しいかといふに必ずしもさうでない。これが、絕對的な意味で云つてゐるのであるならば、藝術そのもの丶本質に就いて大なる誤りをしてゐるものであるし『今日の日本の劇壇』を眼中に於て云つてゐるのであるならば、自己を侮慢し、自己を詐はつてゐるものである。何故ならば前者の場合にあつては、事實、上演されて立派な効果(大向ふを唸らせる意味に非ず)を收め得るものならば、單に讀むだけでゞも立派な効果を讀者に與へ得るものに異ひないからであつて、それはたゞ量の問題である。後者の場合にあつては『今日の日本の劇壇の不備不滿』を認めながらも、猶ほ且つ上演後ならではその作の價値判斷をしてはならないと云ふのであるから、明らかに自己の藝術を裏切るものであるか、さもなくば、自己の作品を『不完全極まる劇場及び俳優』以下に不完全なものと自認してゐるのである。

要するに、苟くも一個の戲曲である以上、又それを藝術品として發表するものである以上、『讀むべき戲曲』『上演すべ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

き戯曲』と區別するのは愚の骨頂であつて、それを批評するものも又、右様に區別して批評すべきではない。

座付作者なるものが、既に一個の獨立した作家でないことは、今日多少なりとも劇の本質を考へるもの丶何人もが等しく認めるところである。然るに今日、この座付作者の弊を云爲するものが（敢へて人名を指さず、問者あれば答ふ）一面、某優に當て箝めた脚本、某優某座のための脚本と稱するものを平然として、寧ろ得々として書いてゐる。これいはゆる座付作者と何の選ぶところあらんやだ。彼は自己の創造力を無視するのみならず、さつきも云つたやうに俳優をも侮辱するものである。俳優自身の俳優としての創造力を無視するものである。斯かる創造性無き、獨創性無き戯曲こそ、一個の獨立した戯曲としての價値を全然認められ得ないものである。彼等も亦自ら一個の藝術家を以て任じてゐる。然して藝術の永久性とか普遍性とかいふことを高言してゐる。それでゐて然も、一人の俳優、一個の劇壇にわざ／＼當て箝めて書いた脚本をしも、これを藝術と云ふならば、自ら自己の藝術の永久性、普遍性を短縮するものであるのみならず、全々作家としての存在を自ら葬るものである。

然しながら、斯くは云ふもの丶、戯曲作家も又『人』である。現在の社會に生きてゐる「人」である。そこで、戯曲を書くことによつて飯を食ふのである以上、既成劇場、既成劇團にお氣に入らねば飯が食へないといふならば、初めつから、やれ藝術の創造性だの、やれ藝術の永久性だのといふことを云はないで貰ひたい（尤も、それを新聞雜誌へ書くことによつて又飯を食ふのだ、といふならば、もう一言も云ふ餘地はない。）

いづれにしても、大臣閣下や侯爵閣下を、自己の創造なき安協的作品の上演に招待することを無上の光榮に心得たり、『千兩役者』の友人であることを誇りにしたり、その又「千兩役者」から「俺に當て箝るやうな脚本を書け」と命ぜられて、隱し切れぬ嬉しさを感じてそれを書いたりする『藝術家としての權威を持てる』戯曲家がゐる限り、そしてさういふ戯曲家が「劇壇の革新」を叫んでゐる限り、現在の日本の劇壇は天下泰平である！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

論叢

生きんとする本能

（加藤一夫氏の『文化運動と勞働運動』を讀む）

渡邊順三

一

會ではキリスト教の牧師であり、後には熱心なトルストイの研究者であつた加藤一夫氏が、近來最も勇敢な社會改革の運動者として、かの不徹底な唯心論の埒内を飛び越えて、明かに現代の經濟制度の缺陷を指摘し、この方面の改革に依らずんば到底現代生活の矛盾を除去し能はざる事を主張されてゐるのは、吾々の頗る意を强ふする所である。

氏の著、論文集『救のない人生』は大正九年の出版である。而して昨年の四月既に第四版を重ねてゐる。日常寸分の隙もない勞働生活に追はれてゐる私が、殆んど讀書の餘暇を持つてゐないので、氏の論文を見る機會が今迄になかつたのであつたが、今度始めてこの『救のない人生』を手にする事が出來た。

二

『救のない人生』のうちの『文化運動と勞働運動』を第一に讀んだ。桑木博士が『若しデモクラシイが社會上の平等を期して、事實上多數を占める劣惡者の水平線に人を引下ぐるならば、之れ到底世界の改造とか文化とか云ふ問題に入る事は出來ない。』と斷言せるに對し、加藤氏が『社會上の平等とは、凡ての人がその生活上に於て平等の機會を得るといふ事である。資本もなく器械もなく、土地もなく金もないがために、それを有する特權者に奴隷的に使用されると云つた樣な事のない、即ち何人にも特權が與へられず何人も平等な機會に於て生活する事を意味するものである。而してそれを期する事が何うして博士の謂ゆる「事實上多數を占める劣惡者の水平線に人を引き下げる事」になるのであらうか。吾々の期する處はそれと反對に、かくの如く社會上の平等を立つる事によつて、劣惡者を高い水平線に引上げる事であり、又事實上引上げ得ると信ずるのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一體何故に博士は「事實上多數を占むる劣惡者」などゝ今日の一般の民衆を輕蔑するのであらうか。今日の社會に於て、一方には博士のやうな立派な人間が出來、一方には博士などから見てまるで人種でも違ふやうに思はれる處の「劣惡者」が生ずる所以は、必ずしも博士及び「劣惡者」の頭腦及び才能の差違からばかり來てゐるとは云はれないのであるかゝる雲泥の差を生ぜしむる主たる理由が社會制度の罪でなくて何んであらう。』と云つて加藤氏は博士の不徹底を痛論し、更に歩を進めて『現今の文化運動なるものゝ多くも自分をもつて見ればやはりブルジョア階級の運動であるより以上には出ない。何となれば諸君のやつてゐる講演も雜誌刊行も書籍出版も、夫れらは皆なたゞ知識階級若しくは有産階級の啓蒙より以上に出ないからである。今のところ第四階級に屬する勞働者には、そんな講演をきいたり書籍を讀んだりする餘裕もなければ、第一さうしやうとする意志もない。又よしその意志と餘裕とがあつたにしても、諸君の論議を諒解するに足るだけの素養をも根氣をも持つてゐない。』と加藤氏は知識のために知識をもてあそぶ知識階級者の迂遠を一蹴してゐられる。

氏は更に「現代に於て最も重要なる事は万人をして均しく生産の手段を使用し得る社會を實現する事である。即ち何よりも先きに生産方法の革命を目的とする勞働運動を實行する事である。』と云ひ「蓋し生産方法の如何は直ちにもつて社會の經濟的構造を決定し その經濟的關係は人間の社會的及精神的生活を決定するものだからである。而して社會ば此の生産力の發展によつて當然に變革されるものだからである。」と論ぜられる事によつて、凡百の文化主義者社會改良論者の群から數歩を進めて居られるものである事を知るのである。即ち世の所謂文化主義者、社會改良論者の間に厭忌されてゐるマルクスの唯物史觀說を、吾が加藤一夫氏は最も忠實に把持し主張して居られるからである。

三

然るにその直ぐ次ぎの行に至つて加藤氏は、『とは云へ自分は決して極端なる唯物史觀說を奉ずるものではない。』と言譯らしい言葉を使つて居られるのはどうしたものであらうか。勿論吾々と雖も氏の謂ふ「人間はそれ自身に於て何らの決定力を有しない機械かなんかの樣に云ふ極端なる唯物論者に同ずるものでは』ないのである。けれどもそれはマルクス自身の唯物史觀ではなくて、この唯物史觀を曲

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

解し誤解する者によつて傳へられた『極端なる唯物論』なのである。然るに吾が加藤一夫氏は――『吾々にして若し文化の興隆や人格の發展を望むならば、何よりも先づそれをして可能ならしむる社會的條件を獲得すべきである。これ即ち文化運動が更に一歩を進めて勞働運動にまで進まねばならぬ理由である。』として頗る明白に唯物史觀說を奉じて居られる筈の吾が加藤一夫氏は、『內的運動は勿論大切である』と云ひ『精神運動は常に常に存すべきである。』などゝ云ふ二元的の說明によつて、讀者を迷宮に導き入れて居られるのは吾々の甚だ遺憾とする處である。斯くて吾々の見る所によれば、一面に於て忠實にマルクスの唯物史觀說を把持して居られるかの如くに見える加藤氏は、他の一面に於ては、世の凡百のマルクス批評家等と同樣の曲解か若くは誤解に陷つて居られるのではあるまいか。

加藤氏自らが『經濟的關係は人間の社會的及び精神的生活を決定するもの』であるから『文化の興隆や人格の發展を望むならば、何よりも先づそれを可能ならしむる社會的條件を獲得すべきである』と說き乍ら、尙『內的運動も勿論大切である。』と云ひ『精神運動も常に常に存すべきである。』とするのは、丁度醫師が病人に向つて『醫療を專一にするより外に君の病氣は治る望みはない。』と云ひながら、『けれども加持祈禱も大切であるぞ。』と敎へるのと同樣の論理の錯誤ではあるまいか？

四

加藤氏が『極端なる唯物史觀說を奉ずるものでない。』と云ふ理由として『唯物史觀說に對する私見』を述べて居られる。そして氏は河上博士譯の唯物史觀の公式の中から『物質的生活の生產方法は一般に社會的・政治的・及び精神的の生活過程を條件づける。人類の意識が其の存在を決定するに非ずして、寧ろ之に反し、彼らの社會的存在が其の意識を決定するものである。』といふ文章を引用して居られる。そしてこの『意識』といふ言葉の意味の穿鑿に十數行を費して居られる。氏は『これをショーペンハウエルは「生まんとする意志」と云ひ、ベルグソンは「生の衝動」と云つた自分は之を「人間の本然力」と云はふとする。』と云つて居られる。又『內由に生き、自由に展びようとする或る不可抗な力である。』とも云つて居られる。そして氏は『吾々は此の內部力を認めない譯にはゆかない。そして玆に、この內部力を認めない所に唯物史觀の缺點がある。』と勇敢に論斷

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して居られる。

『生きんとする意志』と云ひ『生の衝動』と云ふ。之らは吾々の解する所に依れば、『生きんとする本能』である。よりよく生きんとする本能である。或は自我の擴充であり、自我の創造である。或は自己保存の本能である。

吾々人類が過去幾十万年に經驗して來た歴史は悉くこの「生きんとする本能」の鬪ひであつた。吾々の祖先が、永い經驗の結果として、社會生活の必要を悟つた。そして自己保存の本能と共に社會的本能も、吾々人間の内に根强い『内部力』として培はれて來た。

自己犧牲と云ひ獻身といふが如き行爲は、强烈な社會的本能の現はれである。しかもこの犧牲、獻身の行爲も、夫れは決して單なる自己の生の否定ではなくて、却つて自己の崇高なる肯定であり、その實り多き擴大の豫想である。吾々は加藤氏と共に『この内部力を認めない譯にはゆかない。』而して氏の謂ふが如く、果してマルクスの唯物史觀はこの『内部力』を認めてゐないのであらうか？

無學な私が到底この難澁な問題を「諒解するに足るだけの素養をも根氣をも」もつてゐないから、こゝに加藤氏と同じく河上博士の著書のうちから、此の問題に該當すると思ふ個所を拜借する事にしよう。

河上博士の著『唯物史觀研究』に收められた『唯物史觀と必然論』のうちに『物質的生産力の絶えざる增加は、生きんとする意志を有する人間の根本的要求であり、從つて生産力の發展に對する桎梏は、それが自然的のものであらうと、社會的のものであらうと、必ず人間によつて打ち破られてゆく。一定の社會組織が、生産力の發展を束縛するに至る時、その社會組織は必然に打破せらるべきであると、マルクスが主張するのは、畢竟するに彼が人間の生きんとする意志を動かすべからざる前提とするからである。』（唯物史觀研究上篇九十二頁）そして尙『しかるにマルクスは生きんとする意志を有する事をもつて動かすべからざる人間性と見、所謂生存權を是認する事に依つてその議論を進めてゐる。だから生産力と生産關係との衝突に伴ふ社會組織の必然的進化を主張する事になつたのである。』と。

加藤氏に依れば、マルクスの唯物史觀說が人間の『内部力』ショーペンハウエルの謂ゆる『生きんとする意志』を無視せる點が、その缺點である！

河上博士に依れば、マルクスは明かに『人間の生きんとする意志を動かすべからざる前提として』その『社會組織

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の必然的進化を主張して』ゐる！。

五

『吾々にして若し文化の興隆や、人格の發展を望むならば何よりも先づそれをして可能ならしむる社會的條件を獲得すべきである。』と云ふが加藤氏の主張に、吾々は全然同意する事が出來る。『吾々の文化の興隆や『人格の發展』を徂止し、吾々の『生の衝動』や『生きんとする意志』の障礙となるべき禍根に對する、不斷の憎惡と反抗のうちにのみ、吾々は現代に於て生の擴充感を味ひ得る。

如何なる力をもつてしても抑壓する事の出來ない『內部力』の無限の進展は、遂に吾々をして現代社會組織のを疑はしめ、『現』　の一切を否定せしめる。

『万人をして均しく生産手段を使用し得る社會を實現せしむる』事の外に、そして『それを目的とする勞働運動を實行する事』の外に、吾々は遂に救はる可き途のある事を知らぬ。加藤氏が『內的運動は勿論大切である。』としたり『精神運動は常に常に存在すべきである。』とせらるゝ二元的態度に、吾々は到底同意し能はざる者である事を悲しむ。

（十一年一月三十一日）

附記、加藤氏がこの論文「文化運動と勞働運動」を書かれたのは、大正八年七月であるそれから二年半を經た今日、加藤氏は果して同樣の說を固持して居られるか否か、氏の最近の論文を拜見しないから、明言出來ぬ、若し氏が今日に於て、前說を飜して居られるならば、私も此の批評を撤回するに躊躇せぬであらう。兎に角、淺學の身を以て先輩の言說に妄評を加へた事を多謝する。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二月二十二日夜の會話

（ダント劇稽古の夜）

◇

孝　丸　「解放」も「改造」もうれたさうだ。

小　牧　「改造」も今月はいよ／＼「中央公論」か。しかし、來月のクラルテ運動と二月のヘーウッドだけは最近の收獲だ。解放では北澤教授とモンロー主義の復活か里見弴の「なんのかはりなし」は元老堺翁を氣取つたつもりか。

初之輔　山縣の死からクラルテ運動まで並べるところが「改造」の中央公論よりもずるいところだ。中央公論は吉野のデモクラデ一貫してるが「改造」となると賣る爲めには新吉原繁昌記だつて書くからな。

正　俊　だから「文化」がはやるとその化物の出來そこないを出して、同時に若がへり法をかついでゐるんだ、それがある〇〇からの結果だらうか。

虎　雄　改造の請負師は人間建築賀川組か兵庫ひよろひよろ。それに守護神が日向聖人に人格道人、お逗子の無カンチン、鰯の頭も信心からからだ。

淳　三　いや何に先も緣日商人が聲をからしてお客を呼んでると同じだよ、賣つてるものも賣つてるものだが、賣られる品物になつた人間の心と言つたら――やつぱり陽氣な春のせいかな。

光　造　里見弴、相變らず「文藝管見」で、毒にも藥にもならない様な灰汁した文藝觀をクダ／＼とお説法してござる。これが名人の文藝觀だとしたら、名人とは即迷人の謂ひだなと、今更感心仕る次第だ。先づこれ位の管見なら、官憲から壓迫されずには濟むだらうから、どうかその態度を改造しないで、神妙に「改造」にカヂり付いて居給へ。さう云ふ事は生活とは何のかゝはりもない」事だらうからね。オツト、でもない話だ。

賢　三　改造などの執筆者の目次を見てさへ寂しくなる。田中純、宮地、かうした文學者の名前を口にしてさへ寂しくなる。今夜はだまつて自分の感情を凝視める。言葉につくされぬ寂しさをもつて凝視める。

◇

洋　文　時事に書いた田中純の苦笑生活の文學は實にいやなものだ。狐そつくりだ、俺はブルジョアの味方だと、何故元氣よく言はないだらう、片上伸はブルジョアだ、文士は皆ブルジョアだ、だから俺もブルジョアだこんな調子だ。彼等は皆眞理を見まいとしてゐる。

傍聽人　小犬のやうに低腦で、野良犬のやうに卑屈な田中純が、自分等一味の立場がぐらついて來ると、持つて生れたきたない根生を出して、苦笑小説なむとは笑はせる。小菊[illegible]、小里見、小芥川なぞと忠勤ぶりを發揮してゐたが、もう追つつかなくなつたと見える。

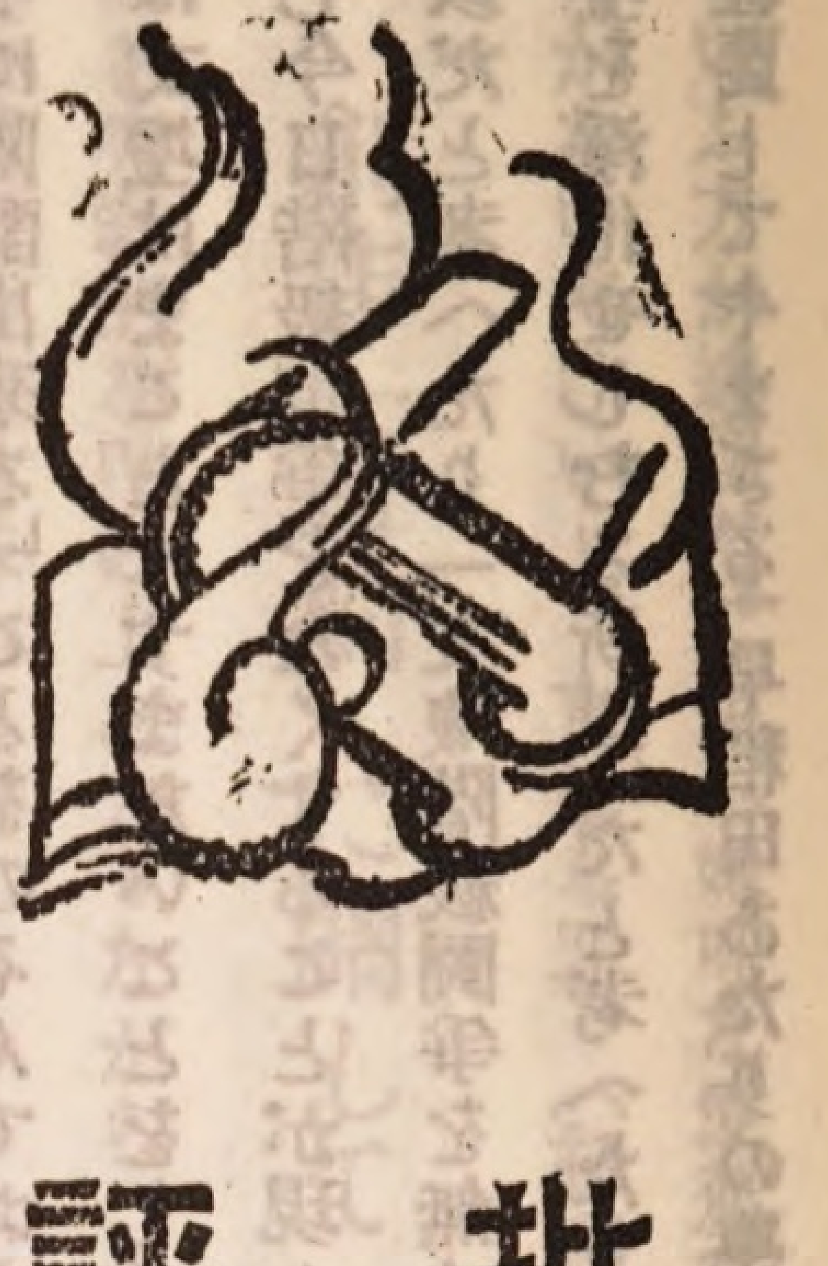
弘　二　さういふと、あの中でブルジョアとプロレタリアは心の持ち方だといふやうなことがあつたが、近頃はそんな理論が流行るのか知ら。辭書を行いてもないやうな文句は、何處で習つて來たらいゝだらうか。

孝　丸　今度『時事』に書いたのは俺はちつとも讀まなかつたが、讀賣へこの前に書いたのは見た。『蔭に怯えるもの』といふのだつたが、どつちが『蔭に怯えてゐる』のだか分らない。彼自身その影に怯えたものであり、追つ掛け何とかではないか！

淳　三　さう言へばさうだ。が、まあ今暫らく我慢してやれ。ぢきに〇〇〇ぎられる時が來るから。さうなるとおそい。影に怯える位な處ではおさまるまい。洋文が狐だと言つたが、しかし〇されて了つてはブルジョア擁護の爲めにばけく出る元氣もあるまい。

孝　丸　敵か味方かそれはハツキリ決めて貰ひさえすればそれで良いんだ。今は力の問題だ。純がいくら不純でも、それをヤツツケル俺達の力こそほことに純なんだ。（赤帶）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



批評

作と評論一三

「阿部次郎氏の人格主義を難ず」（新潮）竹内仁氏の處女評論である。「吾等」に出た「リップスの人格主義評」とまとめて、いづれ論じて見たいと思つてゐるのだ、とりあへず簡單に推賞してをく。ブルジョア觀念學者は眞正ブルジョアが科學上の偉大なる發見をすべて支配階級の爲めに利用するやうに、哲學說・倫理說をすべて支配階級の爲めにねじまげる。マルクスと汎獨主義とを結びつけたり、カントとトライチケやベルンハルゲーとの間の聯絡を探して見たりする。

キリストの神もカントの至上命令もスピノザのアモル・インテルクチュアリスも、凡てが直接間接に彼等の支配の確認の道具になる。それを彼等は人類の文化と稱してゐる。吾等の任務の一つはそこで人類の文化のマスクを一枚々々剝がしてゆくことでなければならない。支配階級のつゝかい棒を一つ一つ取りはづしてゆくことでなければならない。

ソレルがベルグソンの哲學を逆用（彼等から見れば）して革命的サンヂカリズムの理論にいち早く取り入れたことは御用學者を面喰はせるに十分であつた。

阿部次郎氏がリップスの人格主義をかつぎあげて得體の知れない御用倫理學を打ちたてやうとしてゐる時、竹内氏がそのつゝかい棒を一本一本とりはづしていつた。立場がかはるとリップスの應用が代つて來る。阿部氏の答辯こそ見ものである。あの情理をつくした抗議に對して、これを默殺することは「紳士」の禮でなからう。

序だからいつておくが、竹内氏はまだ二十四歲の青年學生ださうである（勿論私は一面の識もないが）、小說壇ではかつて菊池寛氏が二十五歲以下不許入門の立て札をたてたが、評論壇にはそんな禁札がないから自由である。さうして二十五歲どころか三十を越した人の中で單に頭の組織――大腦皮質、腦廻轉――からだけ言つても無茶な議論をする人間がいることを不思議とも何とも思はないのである

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

その實物標本は同じ「新潮」にのつてゐる土田杏村先生である。題して「文壇階級鬪爭と評論」といふ。傍見出し――一讀者の感想――である。この評論で筋道の通つてゐるところは「正直のところ私は一個の門外漢」であるといふ文句と「私は現在の文壇の流行兒中誰れ一人にも親交がない」といふ文句とだけである。

氣取つて高くとまつてゐれば讀者が高く買つてくれると思つた杏村氏は文壇を芝居にたとへて、御自分を特等觀覽席か何かの見物人にたとへておられる。そして「讀者にして見ると高い税を拂つて馬鹿な芝居を見せられてゐるものだ。」と懷勘定を氣にし、「勸進元から聲をかけて『さう長く喧嘩をしてゐてはお客樣に御迷惑ですから、もうよい加減でその話は切り上げて、喧嘩は樂屋だけの聲にして下さい。』といつて貰ひ」たがつてゐる、「美しい心持ちで其の作品の中に陶醉出來る」ことをのぞんでおられるお客樣に對しては文壇はまことにすまないことをしてゐるわけだ。

併し今日階級鬪爭をなくすることが現今の社會を淨化する所以だと考へたり「文壇階級鬪爭を無くすることが現今の文壇を淨化せしむる所以」だと考へたりしてゐる人間は、君の輕蔑してやまざる「早稻田あたりの學生」にだつてありはしない。君などはその崇敬者の一人相馬氏の「第一步」でも熟讀して第一步からはじめ直さぬとざこのとゝまじりも覺束ない。評論壇は二十五歲以下の青年に對して禁制の札をたてないが頭腦の不完全なものには以後禁制の札をたてゝもいゝと思ふ。もういゝ位にしておかう、でないと「評論の口調なり、態度なり、內容なりを嫌なものにして」特等樣には定めし御迷惑だらうから。

小說はごく短いのを二つしかまだ讀まない。一つは「種蒔く人」の「煽動」だ。これは新井紀一氏の作だ、ちよつとクープリンの或る場面を思はせるやうな暗示にとんだ簡潔な作である。內田の話、機關銃の話、馬の話、それ等がちら／＼と慌たゞしく描かれてある。死の停車場へ急ぐ一隊の兵卒の心理、それは今日の社會が生む最も深刻な場面の一つだ。

もう一つは荒畑寒村氏の「武器の發明家」(前衛)だ。これは小說と銘がうつてあるけれども小說としては通らない。寓話である。全體が說明の形になつてゐるからである。アナトール・フランスあたりの作にもこんな風なのがある。志向はまるで違ふが手法に於ては菊池寛氏の小說にもこんなのがある。併しこの作は眼目を全然說明に置いた點に於て

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

寓話といふ方が適切だ。但し嫌味な愛慾寓話よりもこの方が厭味がないだけいゝ。盲評多罪。(初之輔)

創作「新約」に關して

題材を宗教的事蹟の上にとりながら、それに引づられないで、全然宗教的臭味から脱してゐるのは、この書の著者の態度が然らしめたのであらう。著者は前言に於て、この著を以て「人間としての耶蘇」といふ論文に代へる小說だと宣告してゐる。即ち著者の意向は單に題材を耶蘇にとつたのみであつて、決して宗教的目的を有してゐるものでない。それは他の小說家が、日常の經驗をとり來るが如く、この作者はかゝる歷史的事實を用ゐたに過ぎない、それにもかかはらず、題材はしばしばその內容に侵入し、その作全體の氣分を決定する。即ちいかに嚴正に客觀的態度を以つて仕事をしても、題材にひかされて、思はずもその題材の與へる氣分に入ることは常に見られることである。それが宗教的要素に於て特に甚しい。已の作者が敢へてその弊にならはなかつたのは、その態度を保つことが堅つたためであらう。さうしてそれは賞讚せらるべきである、世には作者自身の氣持ちを作中に放散させて、非宗教的なるその作物にまで宗教的感情を漲らせて得々たるもののあるなかに、この作者が却つて反對の場合にあつて、平然として自己を持してゐたのである。さうしてそれが理由のない反撥的憎惡に出でないで、耶蘇そのものを正當に、單に一個の存在としてみつめた所は正しいのである。非宗教的傾向のあるものは、やゝもすれば却つて反對の方に走りすぎるものである。この點について作者の態度のしつかりしてゐたのを認めざるを得ない。

作者はこゝに「人間として」の耶蘇を書いたといふ。この問題はいかに解せられるべきであるか。「人間的」とはあまりにこの頃の流行語である。流行は流行をつくらしめ動もするとそれの發起人にとつては得意のことであるが、流行のあとを追つて得々たるものは見苦しい。ことに精神的分野に於て、それはその個人の個性なきことを證して余がある。世を先んずること一步して彼は才子であると共に、それはつひに流行を追ふ輕薄兒である。世に遲れること百年にして彼は却つてその個性を保持し得るものである。オスカー・ワイルドはその輕薄兒の一人であつた。しかも彼にはなほ世に遲れる一面を有してゐた。これ彼が一小才子に外ならずして、またなほ世の彼に劣るものをして導かしめ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るに足りる。「人間的」乃至「人間として」といふ造語は近來わが文壇及び思想界の流行語である。人間とはそも〳〵何であるか、之を解すること難くして、實は流行としては何でもないのである。あらゆる流行が內容をもたざるが故に流行すると共に、內容を有するものは決して流行となり得ない。個性は模倣を嫌ふ。個性は內容は立ち入つてそれを驗すると共に、外面的皮相の模倣に屈しない。日本のいはゆる思想界、文學界はいたづらに流行を好むが故に却つて個性を忘れてゐるのである。この作者が一輕薄才子であつて、この流行の合言葉に共鳴したものであるか否かは、この小說「新約」全部が證明するのである。

思ふに「人間」及び「人間的」とは、かのルネサンスの精神にかへるべきである。即ちそれの意義は中世いはゆる敎權時代に於て、それに反抗して光榮をギリシアに求め　人間の本性を求めたところに存する。もしも思想にして、一がギリシア的なもののあつて存し　一がユダヤ的なるものゝありとすれば、中世は正しくユダヤ的なのである、さうしてギリシア的はそれの正面の敵でなければならない。人間的とはそこから出發して、つひにペトラルカ・ボツカチヨの如きものにまで及んだ。今日本の現狀に於て、日本がルネサンスを經過せずして、以來として古代意識の下にあることは、余の豫ねて切言したるところである。そこには基督敎の敎權時代はなかつた。しかしながらそれの精神の共通なる、支那儒敎的及び日本の傳說は、日本をして、歐洲中世とひとしき狀態においた。これに對するルネサンス、即ち解放の精神はもとより日本人の內部から自發的に出づべきである。しかるにもかゝはらず、日本の生活體系が常に然るがごとく、この場合にも、日本人はそれを外から仰いだ。即ち輸入は日本の生命であり、模倣は日本の常態である、かくして解放の精神さへ之を外國から輸入した。そこに生煮えなる流行語が頻發されるのである。今人間的とは即ち日本人にあつては、一面には流行語であり、一面には生煮えの內容をもつ。それは單に表面通りの「人間」又はより惡しく「獸性」そのものを以つて「人間」性となし、之を解放とする。そこに事相の事實及び解釋に對する相對的相違が生じて來る。故にいたづらに戀愛を高調したり、本能を讃美する。それは事實として正しいとしても、つひに一流行としてのみ認められてゐるのである、これ個性なきもののわざである。

江原氏はこの問題をいかに解いてゐるのであるか。余の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見るところを以つてすれば、氏はつひにその提出したる題目「人間としての耶蘇」を完全に解き得なかつた。氏はたゞ表面的なる解釋に於て滿足し、つひにルネサンス及びこれが開いた現代に於ける個性の問題を逸し去り、兼ねて日本の流行語以上に出ることを忘れてゐた。氏が四十年の體驗をこの一書に懸けたといへども、その結果はつひに貧れなものであつた。氏の描いた耶蘇はつひに一個の平凡兒である。それが「人間」であるといふかも知れない。しかしそれは「人間」であると共に、つひに「耶蘇」なることを忘れたものである。氏が暗示を得たといふメレジュコフスキーを見よ、また「ジャン・クリストフ」に於てロマン・ロランの示したるところを見よ。「人間」及びそれの解釋の相違がつひにいづこにあるかゞ知れるであらう。「人間」性を認めたるルネサンスがギリシャ的であるならば、氏の提出したる「人間としての耶蘇」は正しく面白い試みである。しかも氏はつひに耶蘇をルネサンスによつて見ることが出來なかつた。氏が三卷を費して描いたところはつひに一個の文字通りの歴史物語であつて、それ以上の何物でない。嚴正なる意味に於ての批評的精神がこの作に於て示されてゐないからである。氏はつひに耶蘇を批評しなかつた。またそれによつて現代の小說として、即ち現代日本に於ける歴史小說として、日本の現狀さへ批評しなかつた。凡そ歴史小說は單にその時代の鏡のみであつてもいゝと共に、その時代の批評があれば更にいゝ。更に之を通じて現代の批評がなされば最もいゝのである。ロマン・ロランは「ジャン・クリストフ」によつて、大戰及び大戰後の世界に一つの道を敎へた。「新約」はつひに一つの歴史的小說としてその物語りの面白さのみしか與へてゐない。然らば日本人として、否、一江原小彌太その人が何故にかゝる歴史物をつくるべきかその必然性が疑はれるのである。もとより氏はいふであらう。余はユダに余が全精神を傾倒した」と。しかしながらユダはこの小說にあつて何らなすことなき一人物にすぎない。彼はちよいちよいと鋭い批評を放つてゐるが如く見える。しかしそれは單にその物語りの一時的事相である。江原氏は意識してか、意識しないでか、寧ろダビテルより多くこの小說の精神を注入した。ユダの如きは反逆するといふそのことのみをする人形の如きものに過ぎない。ユダの得たる精神は結局ダビテの精神である。より苦しみ、より考へ、よりよく批評するものはユダにあらずしてダビテである。ユダは單に思想なき一漢子に過ぎない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

耶蘇自身の思想は何であるか、彼もこの書に描かれたるところによれば、結局タビテ以下である、彼は自己をもたない。彼は「神の子」であると共に、神の意志の外、自我意識を有してゐない。彼は反逆者の如くにして實は奴隷なのである。その故にユダもまた反逆者の如くして奴隷である。もしも機械的人生觀が正しいならば、これらの神のいふところも正しいであらう。しかし現代は科學の世界であると共に、機械の世界でない。ニイチエは基督敎に於て奴隷の道德を見出した。さうして今日の日本に於て、基督敎にあらざるも「奴隷の道德」はあまりに多い。江原氏は自ら反逆者としてのユダに自分の全生命を吹き込んだといふ。その反逆者が一人形にすぎない限り、ユダはつひに現代の革命家でない。現代は現代の革命家を要求する。それは絶對自我主義者である、それは他の權威を欲しない。神の權威を望まない、この點に於て、作者はつひに「人間」としての耶蘇に失敗した。

更に氏はこの書によつて現代の改造の問題として、物的改造か、心的改造かを考察してゐる。しかもそれは余をしていはしめれば、やはり世の流行語のそれの外の一歩を出てゐない。耶蘇が後者を代表し、タビテが前者を代表するものとしても、その二者とも、つひにこの書の限りでは徹底的に解決されてゐない。これ作者自身の思想が未だ不充分なのを示すものでなくして何であらうか。

最後にいはゆる christianity の問題についていひたい。眞の基督敎の精神が何であるかの解釋によつて、それは異つてくるのであるが、少くとも余の解する限り、作者はやはり之をダビテにより多く歸してゐる。この場合に於て、基督敎の精神が甚だしく變異されてゐることはいふまでもないのである。ゲーテは非基督者として知られてゐる。しかもフオルクマンのいふところによれば、それがゲーテの眞の基督者たる所以であつた。解釋はいかやうにでもつけられる。故に近來の基督敎徒は好んで希臘主義と結合しようと企ててゐる。事實さうでなくしては、基督敎の立場がなくなるからであらう。さうしてそれによれば、結局この作に於て、眞の基督敎徒はダビテでなくてはならないといふことになる。しかしそれは作者もはじめから豫期したことであり、さうなるのが正當であらう。要はかゝる意味に解してまでchristianityを保存する必要があるか否かである。余自身はもとより之を否認するのであるが、世に之を肯定する人があるとするも、余は敢て之に異議を申し立てない

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

であらう。

江原氏の創作「新約」は、それの根本的思想に於てかくの如き弱點を有してゐる。その弱點はけだし致命的なものであらう。しかもかくの如き解決を下さずして、一個の江原氏が見たる歴史小説として之を見るとき、それは面白いといひ得る。その面白さが讀者をひきつけるのであらう。

（正俊）

小説 父、母、妻、子

菊池寛（改造）

例によつて、惡口を言ふ。父、母、妻、子は題の示すとほり、父、母、妻、子といふ四つの別々な小品である。さて、何時もながら、僕は菊池氏のものを讀んで、惡口を言はねばならぬことを悲しむ。

うちで『母』の方は、四つの小品の中では一番いゝものだと思ふ。だがそれも、例に依つて菊池氏一流のもので、僕等が期待してゐる藝術から見れば、まだ／＼相距ること遠いものである。實母と伯父との密通を、夏の一夜、幼な心で半信半疑のうちに知つて、それが母の死後まで蟠つてゐて消えない。大體はそんなテーマであるが、最近見た氏のものでは一番善いものではないかと思はれる。

『父』は、家康が自分の子の信康を殺すまでの經緯や、その時の心持、臣下の心持等を書いたものが、これは氏の歴史ものゝ中でも尤も愚作であると思ふ。何の爲めに、こんなものが書かれるのか。何の興味があるのか。その心理状態に興味があるのか。――氏が嘗て、田中貢太郎氏か誰だつたか情話作家のことを、小説家と比較して猿が人間と比較して毛が三本足りないから、人間になれないのと同意義で、上手いには上手いが、何處か毛が三本足りないところがあると言はれたと思ふ。だが、菊池氏のこんな作を見ると、僕等には菊池氏こそ上手いには上手いが、毛が三本足りないのだと言ひ度くなつて來るのである。要は、――氏は矢張りいゝ素質を持つてゐながら、時代を巧利的に上辷りして眺める、通俗作家の類に墮してゐるのではないかと思はれる。總べて、巧利は御免だ。

『妻』は、夫が段々出世するにつれて、その妻が以前は貧乏だつたけれども、家庭生活の樂しさがあつた。今は夫が段々家庭の人でなくなつて來る。で、妻は夫の仕事を理解し、夫の愛を縛ぐ爲めに、何うにかして頭を夫の程度にまで高め度い、そして夫と話が合ふやうになり、昔のやうに

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

樂しい家庭を作り度いと思ふやうになる。それで、その手始めとして、英語の單語などをこつそり勉强する。その控へを、一二度讀んだ夫が、妻の心持を察していぢらしく思ふのである。――僕はこの作を讀むと、氏が現代の何物かの如く、併も餘程新らしがつてゐる何物かの如く、有り難い温情主義の持主であるのに氣がつく。その他、言ふべき何物もない。

『子』のことは、此處では言ふまい。その理由は、批評を書くべく餘りに愚劣な作であるからである。成程、面白い筋である。が、今一皮を奪いだ文明批評が僕等には聞かせて欲しい。藝妓に賣られた子供の心境にしてもが、あんな見方でなく、今一皮内面を見たならば、もつと、違つた考へ方が浮ばねばならないに相違ない。――惡口、以上――

（弘二）

津田光造の小說

津田光造君のムキになつて、頭からたゝかずには置かぬ批評を知つてゐるものはあるが、光造君の小說の發表を知つてゐる人は極めて少ない。それは小說類の出しそうにもない大同館から出てゐるためかも知れない。また、廣告政策がまづかつたせいかも知れない。今の世の多くの小說は油繪より額椽（廣告）の方が立派だ。といつて、僕は俄かに津田君の小說をかつぎ出すものではない。事實光造君のものは小說といふよりも、むしろ感想に近いものだ。そうして、そういふ氣持になつて讀むと、津田光造君が眼の前に現はれて來る。多くの自叙傳作家は自分から全々離れたもの、自分の精神を美化したものを憶面もなく誇張して、自分の眞勇主義をほこりたがるが、津田君のなかにはそれを見出すことは出來ない。そして、それどころか、自分をどうして、目茶苦茶にあそこまで待つて行けるか、作者自身よりむしろ讀む人をはらはらさせる。實際亂暴な人だ。そしてこの人は、常にあとで、ひとりでやきもきしてゐる。そして、俺は駄目だと、ひとりで嘆息する。そうかと云つてがつかりしない。直ぐまた畜生ッと燃えたつ。そうすると、額が電氣をかけられたように異様なけいれんする。（これは光造君と話してゐる時の感じだ。）そして、これが小說ならば紙の上にペンがギリギリうなつてゐるやうに覺えるこゝに、作者と作物と全く一致する。光造君は初めは自己そのものを描くことをつとめて避けやうとするらしい。そうしてゐるうちに、感情がたかぶつて自分といふものをむ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

き出しにする。僕は決して作者の生きた感情そのものを作物に是非現はさねばならぬと主張するものではないが、もし津田光造の小說を讀まれるならば、津田光造はどんな人であるかを多少知つてかゝらぬと、讀者は津田光造といふ作家はおそろしいフアナテイフクな作家であり、また作そのものもあまりと云へば亂暴であることに驚かされるであらう。津田君はたつた二つのものを發表してゐるだけだ。しかも、この二つを切り離すことが出來ない。それは「青年教師の懷疑」といふ感想と、「大地の呻吟」といふ長篇小說で、いづれも今から三四年前の作で、ともに大同館から出てゐる。ことに、「青年教師の懷疑」は、「二宮尊德の人格と現代」といふ單本の後尾に收められてゐるのであるから、よほど尊德を愛慕してゐる人でない限り、一般には知られないだらう。しかも、この「青年教師の懷疑」を切離して「大地の呻吟」を讀むことは意味をなさぬと云つてもいゝ位だ。この二つの作品は國家に叛く一小學教員の心情と叛いたことによつて貧しき家庭に更らに人生の最も痛ましい不幸それは教員の妻の自殺である――反抗、破壞を物語つた血と涙の記錄である。津田君は小學教員でありながら、作中こんなことを平氣で云つてゐる。いや、津田君として言はずに居られなかつたのだ。

「では、矢張り、革命を是認するんですね」

「よく露西亞はあれまで徹底してやつたと思ひますね」

「君は國民教育者として、さう云ふ思想を持つて居るのは危險だ」

「少しも危險な事はありません」―「青年教師の懷疑」―

二つの作品を通じて、津田君の理論はしばしば感情に走り切つて議論のなり立たない箇所が多い。また、津田君は藝術家の苦しみを反抗的に表現してゐるが、それは丁度戀を失つた人のやうに、多くの失戀者はことごとく悶へてゐるのに、天は自分のみを苦しめてゐると思つてゐると同じ氣持である。光造君でなかつたら、死んで仕舞へと云つてやりたくなる。しかし、作者のいゝところは讀者にいささかも同情を求めて居ないことである。そこが彼のムキが徹底してゐる所だらう。その意味で「大地の呻吟」の前半は作者が冷靜であるだけ讀者の胸をつくものがある。

總體的に二つの作品には方々に統一のかけてゐる箇所がないでもない。ことにそれが、作者が殊さらに小說にしやうと努力したような箇所に於て見出す。僕の考では、作者は自分の感じを世間の作品に拘泥せずに、思ふ存分書きな

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぐつた方が力强いと思ふ。

津田君は今後どんなものを書くか知らない。しかし、津田君の作品が、社會運動のために無くてならぬ小學敎員に多く讀まれ、それらの人たちの同じ氣持を一層强烈にすることを僕たちは希ふそうすれば、津田光造君の小說の價値如何よりも、そういつた大機運をつくつた精神が今後の導火線となつて藝術家より活動家としての津田光造を一層躍如たらしむることであらう。（小牧）

十年前の戯曲集

秋田雨雀氏の『埋れた春』

秋田雨雀氏の『埋れた春』を讀んで見た。この小さな戯曲集は大正二年に春陽堂から出てゐるから、かれこれ十年位前の作品ばかりである。

何故こんなに古い作品集を讀む氣にかつたか、それは判然と答へることが出來ない、が、兎に角批評しなければならなくて讀んだのでなくて、讀みたくて讀んだのである。

我々はしば〳〵こんな氣になることがある。

『是非あの男に會ひたい』といふ氣持である、用件があるわけではない、話したいことがあるわけではない、只漠然と會ひたいのである、そしてその氣持はその男以外では滿足出來ない氣持である。

かういふ男はきつと何かを持つてゐるに違ひない、非常にユニツクなものを、そして人間の魂にぢかにふれて來るものを、距離や時間を超越してぢかにふれてくるものを、その何かは　その男の持つてゐる詩である――から、自分は考　る。

詩のない藝術を自分は信することは出來ない、いくら思想的でも、いくら心理的であると言つても、詩のない藝術は自分にとつては零である、詩こそ、最も思想的であり、心理的である、そして詩は眞理の母體である。

下品な詩があり得ないごとく、上品な詩もあり得ない、詩は子供の心である。自我的であり世界的である、彼はいつでも創造する、だから彼はいつでも〇〇とならざるを得ない、何故なら彼は非常にやさしくて、非常に强いからである。

秋田雨雀氏は詩人である、日本の文壇に珍らしい立派な詩人である。だから氏は菊地氏や里見氏のやうに流行作家にならなかつたのだ。何故なら詩はテーマや技巧のやうに眼につかないから、詩はたゞ人間の魂にぢかにふれる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女工を書いた『土地』などから見ると、『埋れた春』にある四つの戯曲はあまりすぐれたものでない、淡い神秘感のために、感情がぼかされてゐる氣味がある、而して、兎に角非常に氣持がいゝ、どれもこれも子供の元氣な顔を見るやうに氣持がよい、青空を見て、歌をうたふやうな心よさを感ずる、この快さは全篇にながれてゐる詩の力である。

『埋れた春』、『十字架を負へるシモン』、『林檎園』、『星の下』この四つの内で、自分は林檎園が好きだ、この戯曲は日露戰爭で出征した長男を中心として、父、妻、妹、それ〴〵の氣持を書いたものだが、ごく僅かの饒舌をのぞいては、實にすつきりしたいゝ戯曲である。

この戯曲は舞臺そのものが詩である、赤い日にてらされた林檎園、雇人達がうたつてゐる卑しい盆歌、遠く、かすかな鷄の聲、この平和な自然の中に、戰爭の恐怖からくる人間心理の復雜なもつれが、織り込まれてゐる、人間では園主と、出征した息子の妻君とが一番よく書かれてゐる、ことに妻君の寂しい心持が、最も少ない言葉で、最も印象的に表現されてゐる最後の場面の幕切などは、何となく物凄い感じを與へる。

この戯曲を讀んだあとで(今でも)一番氣になつたのは出征した息子の友人(騎兵中尉)である、どうも、自分は軍人を舞臺に見るのはいやだ、町で軍人を見るのに何とも思はない自分でも、舞臺であの裝と、あの劍を見るのはいやだ、軍人は喜劇以外新らしい芝居には禁物のやうな氣がする、ストリンドベルヒの犧牲なども自分はかなり好きな戯曲だが、何うも軍人が氣にくはない。

『十字架を負へるシモン』は面白いものだが、こなしきれない不自然な箇所が、ところどころに見える、二人の娘が歸つて來てからの會話は、やゝ常識にとらはれて、詩を逸したうらみがある、而し最後がいゝ、大きな金貨を出して(おゝ何といふ立派なデナリだらう、立派なカイゼルの顔が鑄てあること!)シモンの妻君が叫んだ、この幕切の言葉は、實に複雜な暗示を自分達になげかける。

その暗示から呼びさまされる考へは人々によつてちがひがあるだらう、自分はすぐ『神のものは神へ、カイザアのはカイザアへ返せ』と言つたキリストの言葉を思ひ出した。

吾々はたしかに返さなければならない。

神に、ブルジュアに。

彼等の詐欺と壓搾が生んだ、呪咀を憎惡を、そして吾々は生れたまゝの一切のものを彼等から返してもらはなけれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ばならない。

その手段はたゞ一つだ。

眞理に從へ。

『埋れた春』を書いた我々の詩人、『土地』のごとき傑作をのこした我々の詩人は、十年後の今日、どのやうな成長をしたか、それを自分は全知しない、が、去年明治會館で氏は、今日の新劇流行を諷刺して、第二の新劇運動はこの社會全體がかわつた時でなければ起らないことを明言した、これは至言である、氏はやはり人民の詩人であつたのだ、けれ共、自分は二月號の新小說に發表した氏の戲曲には感心しない、あれは詩の墮落だ、民衆藝術は決してあゝいふものでないと思ふ。

詩が詩であつた時、それは人民の藝術なのだ、東北の詩人は東北で人民を、世界を見出す可きだ。（洋文）

（――二二、二、一五）

美術

朱葉會と漫畫展

――三越吳越店――

一月劈頭の展覧會として、又それぞれの意味に於て變つた、――一つは我國婦人洋畫家の最大團體、一つは漫畫家唯一の團體、としての意味で、この二つの展覽會を見ることにした。

尤も始めから大した期待をもつて見に行つたのではないが、如何んせん、矢張り毒口を吐かねばならぬことを殘念に思ふ。あの三越の混雜の中で見たせいか、會場へ這入り込むとむつとして、落ちついて見てゐられない。そのうちに、何の繪を見ても、そんから壓になつて終つた。まるで一種の遊戲みたいな繪ばかりだ。貴族趣味橫溢の、甘い、カステラのやうな繪ばかりでヴンザリする。成程貴婦人方の繪だけあつて、お菓子のやうに上品に、口に入れたらとろとろと溶けさうな繪ばかりだ。餘りに抽象的ではあるが、何うも僕等の胸にピンと來るものがない。それは貴婦人方の生活圈内にまで這入つて行かねばならぬことだから、結極は彼等の實生活の問題になるのだが、それだけに僕等の望む藝術とは、千里も二千里も離れてゐて、全然他人であり、何時何處で會はうといふやうな氣がする。遊戲は止してくれといふ氣がする。又語を代へて言へば、正に亡びんとしてゐる人々の、その正體を變へた或る物、片影とでも言はうか、――それの最後の閃めきとでも言ひ度い氣がする。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此處に斷つて置かねばならぬことは、二三の異例の人の這入つてゐることである。それは第一に松本正子氏である。氏の小品三點、皆山の繪であつたが、それは朱葉會唯一の尊敬するべき作家である。氏の感じ方、タッチ、色彩、それを今くど／＼敷く言ふのは止めるのが、恐らく氏は我國唯一の女流作家と言ひ得るものである。三點共僕は立ち止つて、暫らく見入つてゐた。

次には、高間ふで子氏である。氏の藝術は未だ未知數であるが、今後の進みやうによつては、その未來派ばりの、後期印象派を通り越したやうな作風は、まだ／＼善くなつて行くだらうと思ふ。せい／＼努力して貰ひ度いものだ。寫生の繪、日本橋など、いゝと思つた。

埴原久和代氏のは、一點あつたさうだが、惜しい哉見落して終つた。井上よし子氏は、或るレベルまで達してゐるだけで、何うも手本以外に一歩も踏み出してゐないやうな氣がする。有馬さとえ氏などは何うしたものだ。其他小寺菊子氏、渡邊百合子氏、等々、——は何うも問題にならない。お上品さよ、お上品さよ、と言ひ度くなる。

それからくるりと廻つて、漫畫展覧會の方になると、先づ賑やかなこと／＼と言ひ度くなる。同じく三越の續きで、朱葉會よりも見物が多いやうだ。

此處では一々の批評は止すことにする。それは上手下手の問題ではなく、已に頭の問題であるからである。上手下手の問題ならば、一同上手過ぎる位ゐに上手いものだ。だが、只單にそれだけでは何うにもなるものではない。つまり、深刻な思想を、今の漫畫家諸氏は持つてゐない。四流、五流の小說にあるやうな駄洒落や皮肉、それだけでは漫畫の價値は仕方のないものである。いやに思想めいたものだと思へば、長原止水氏のものゝやうな、一人よがりの何だか理由の分らぬ思想をほのめかした代物だ。其他、政治家の顏を漫畫化したり、五百羅漢とかでうんざりする程人の顏を列べたり、落語家の顏を描いたり、女の尻に當つた瀧の水が男の痩せ身體にひつかかつたり、單なる、所謂新聞式のものでは、可笑しいばかりでちつとも考へる餘地がないのである。漫畫はそれでいゝのだと言ふなら、それは又別問題だが、深い意味から考へたならばそんなものではあるまい。兎に角、腕達者揃ひで、腕がうん／＼ウナツてゐるにしては、頭の貧弱さ驚くべしである。この意味では、未來派、或ひは獨逸の表現派などは、我國の漫畫をより藝術的にしたものであり、我國の漫畫もよし形や表現法が變つて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐたにしたところで、其處まで行かねば本統でないと思ふ。今のまゝでは、僕等には未來派、表現派により多くの期待を持つものであるが、我國の所謂凌雅が、當然其處まで行かねばならぬものだと思ふから、此處に敢て苦言を呈して、ヘイチヤをきめ込むものである。（弘二）

再び民衆と映畫に就て

私の民衆と映畫論に對して、示野吉三郎君が反對意見を寄せられた（發賣禁止の前號に掲載）ばかりでなく、その他にもいろ／＼反對があつたらしく思はれるが、さうした反對意見の出たといふことは、私の主張がそれ等の人に充分の了解を得なかつた爲めではないのか。最つと突きつめて言へば、私があゝいふ觀察をするやうになつた根據――はどこにあるか、それを明らかに了解して貰ひなかつた爲めではないかと考へる。

なにしろ、あゝいふ短い感想風の文章では充分意を盡くされなかつたので、ずゐぶん大まかなもの言へようをしてゐるのである。それを顧ると、示野君などの反對論は無理のないことゝうなづかれる。今、示野君にお答へするのを機會としてほかの讀者からの了解も得たいのである。

元來私は、地方に於て數年間映畫劇の説明に從事して來た。そして私は、映畫劇が觀客の心理にどんな反映をするであらうかといふ觀察を怠らなかつた。私のいふ民衆は、さうした、私の接した地方の無智な虐げられてゐる、觀客の精神の底を流れてゐる素朴な、單純さ、（私は都會のほんたうの意味の勞働者にもそれを見た）を標準としてつかまへてゐるので、それ等の無產無智階級が、映畫劇を見る時どんな心のうごきを示すか、無意識的な感情の起伏はどんなあらはれるを見せるか――に就ての觀察が、やがて私に理論を拔きにしての直感を染ませたのである。それだから、さうした心持のうごきを、「民衆が映畫劇を見てゐる瞬間はまつたく本然の自己をむき出しにする。尊むべき彼等の單純はそこで憤怒し痛快を感じ愛し憎み絕叫し號叫し快笑する」と、私をしてハツキリした言葉で言はしめたのである。私はそのやうに固く信じてゐるからである。つまり、單純な感情のうごきや心持のあらはれを、即行爲と見たとも言ひよう。さうした民衆が映畫劇を見る時、猶赤裸々な單純さをさらけ出すのを、（本然の自己に立返る）のだとして私の映畫劇に對する理想が出たのである。（最つと現實的に完成された映畫）といふのは實人生を走裸々々に映畫化する

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にしたがつて、必然的に、征服階級の醜惡と罪惡を見せつけることになり、無智な民衆がどんなに虐げられ、ふみにじられてゐるかをあるがまゝに知らしめることになるからである。さうして自分等こそ此の世の中で一番劣等なものゝやうにひがみ、いぢけ、自暴自棄になつてゐる吾々の尊い仲間であるところの彼等をして、すべてが率直な行爲にあらはれる單純さにこそ、何等やましいところも恥るところもない正しい人間の生きかたを生きてゐるのだといふ、自己尊貴の覺醒をあたへることにもなるのである。

『民衆が感情の發散以上に驚愕して自分の眞のすがたを凝視する時、そこではじめて民衆は救はれはじめる。戰ふか、握手するかを覺ると言つたのは前述の理由から來てゐるのである。そして『映畫劇の完成は、必然、ブルジョアの心臟をゐぐる△△ともなる』と說いたのは、宣傳的な意味からではなくて、獨立した映畫藝術論としての結論であり完成への提示である。あの短かい文章には映畫を藝術的な立場から詳細に論じられなかつたので、結論だけを、民衆論と結びつけたのである。

扨て、かう書いてくると、示野君と言ひども私と同じようなプロレタリア意識の出發點にありながら、まるきり違つた立場からものを言つてゐるのが解つたであらう。示野君は知識あり教養のある青年觀客の一人として、その現在の映畫に對する不滿は、理智的な心持のうごきからうまれて居り、示野君自分一個の不滿が私に對する反對論の根據の一部になつてゐることにもお氣が付かれたであらう。

しかし、私は、私を比難する根柢が、「、ブルジョアの產物だら、それの宣傳や讃美』であることを、自認するか、と言ふにあることはわかりきつてゐながらこれまで書いてきたのである。私の『映畫に對する理想』を冷靜に讀んでくれたならば、現在の映畫に對してどんなに不滿を抱いてゐるかを、すぐ首肯されることであり、その點に於て示野君は私の心持に裏書したやうなものである。『假りにその題材がブルジョアの讃美であり、宣傳であるとしても』と、ブルジョアの產物であることを私は前提として書き出したので『民衆との交渉』が出發點であり、その問題を主として書いた爲めに、『資本家の經營』などゝいふ方面に觸れなかつたのである。「現實的に完成される」と言ふのは、映畫を映畫として製作と經營など、切り離したものである。映畫の製作や常設館の經營などの問題を書く時は、私は卒先して「種蒔き社の活動』でなければと叫ぶ心持でゐたことは、あの短い文章のなかに充分にじんでゐた筈である。（賓三）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

世界欄

第三インターナショナルとエスペラント問題

第三インターナショナルが補助語としてのエスペラントを採用す可きや否やの問題に關して、僕たちは已に十二月號に於てモスコウの意嚮を述べてあるが、同問題は昨年の夏の第三萬國共產黨第三大會に、スキス、フランス、イタリア他九ケ國代表並に教育インターナショナル代表の名に於て提出され、世界語採用期成委員會によつて支持された。委員長Hoenen（ドイツ）は七月十二日の會議に於て世界語採用法議案は大多數（棄權一票）を以て討議に附せずして可決せる旨を宣し、期成委員會は直ちに該決議案發表方を各國の□□□機關新聞雜誌に依賴した。

由來エスペラント、イドのいづれを採用するかは永い間の懸案になつてゐる。そして形成は多少前者に有利らしい。最も玆に云ふエスペラントとは革命的エスペラントを指すもので、ブルジョア・エスペラントとは何の關係がない。（本誌創刊號參照）第三萬國共產黨はイド、エスペラントの何れかを採用するかは未だ判然してゐないけれども、最近の「從軍者インターナショナル」及び「教育インターナショナル」は明かに革命的エスペラントを採つてゐる。しかるに、革命的エスペラント派は事態の紛糾を避けるために、第三萬國共產黨の採決のあるまで一九一九年の宣言をまもることに申合せしてゐる。一九一九年の決議とは他ではない。「自分たちはエスペランチストである關係上、エスペラント派の訓練には從はなければならない。しかし、第三萬國共產黨員たる以上同黨の決議には絶體に服從しなければならぬ。それであるから、第三萬國共產黨の大會でエスペラント以外の世界語を採用すると定まれば、自分たちはそれに服從しなければならない。いづれにもせよ、□□運動から云つても、世界語の爭で二勢力を殺ぐことはよくない」と。そして、これが署名者は、

スキス Jules Humbert-Droz フランス Boris Souvarine イタリア Gennari イギリス Bell チエコ・スロヴアキア Burian スキーデン Hoglund ユゴ・スラヴイア Marcvitch メキシコ Ramirez スペイン Marino Garcia 日本T、デンマルク Nio's Malken 佛國青年共產黨 Laporte 教育インターナショナル Jorg Muzer 他二十箇國代表及び期成委員會 Tos. Pogany Henri Guilbeaux, Hans Itschner であつた。

第三インターナショナルの勢力

こんな場所で第三インターナショナルのことを話して良いものか、どうか解らないが、（僕たちは四月號に新に「資料」欄を創るつもりであるが）第三インターナショナルの勢力についての面白い種を不圖手にしたから一寸玆に紹介する。言ふまでもなく、これとても

完全なものでないことは筆者自らそう云つてゐる。筆者はラコウツキで、材料は昨年十一月十三日の「プラウダ」これで見ても組織されてからやつと二年經つか經たぬ第三インターナショナルは烏合の徒の寄合でないことが解るだらう。

國名	人員	機關新聞	機關雜誌
北アメリカ	一〇、〇〇〇	七	三一
オーストリア	一八、〇〇〇	一	三
イギリス	一〇、〇〇〇	|	三
アルジャンチン	五、〇〇〇	一	一
オーストラリア	一、五〇〇	一	二
アルメニア	五、〇〇〇	|	一
アゼルバイジャン	一六、〇〇〇？	|	|
ブルガリア	四〇、〇〇〇	|	一一
ベルギー	一、〇〇〇	|	一
ブハラ	六、〇〇〇	|	二
ハンガリア	―結社	|	二
ギリシャ	二、〇〇〇	一	三
ドイツ	三六〇、〇〇〇	三三	九
チェッコ・スロヴアキア	三六〇、〇〇〇	七	四六
オランダ、	四、〇〇〇	一	二
ジョルジア	一一、〇〇〇	四	五
デンマルク	一、二〇〇	一	一
極東共和國	七、〇九五	六	|
エジプト	一、五〇〇	|	|
イタリア	七〇、〇〇〇	三	一二
スペイン	一〇、〇〇〇	|	|
アイルランド	三、〇〇〇	|	|
カナダ	一、〇〇〇	|	一
支那	不明	|	|
朝鮮	不明結社	|	|
リュキサンブルグ	六〇〇	|	一
ジャヴア	四、〇〇〇	|	一
レトニア	不明結社	|	|
メキシコ	一、二〇〇	|	|
ノールキー	九七、〇〇〇	一四	二三
ポーランド	不明結社	|	|
ペルシャ	二、〇〇〇	|	一
パレスタイン	五〇〇	|	|
ポルトガル	四〇〇	|	一
ルーマニア	四〇、〇〇〇	三	六
ロシア	五五〇、〇〇〇	九〇〇	一二
トルコ	不明結社	|	|
ウクライラ	六一、〇〇〇	四五	二
ウルゲー	一、五〇〇	一	|
フランス	一三〇、〇〇〇	三	二〇
フインランド	四〇、〇〇〇	三	六
チリー	不明	|	一
メキーデン	一五、〇〇〇	二	一〇
スキス	六、〇〇〇	三	一
エストニア	三、〇〇〇	一	|
ユゴスラヴィア	八五、〇〇〇結社四		八
南アメリカ	七五〇〇〇		一
ニホン帝國	九〇〇結社―		
青年共産黨	八〇〇、〇〇〇		五〇

小計他の二三國を入れると人員二百八十万六百四十五、機關新聞六百四十八、雜誌三百五十一、これだけ。尙最近のインターナショナルの運動を知るためには Paul Louis の La crise du Socialisme mondial は參考になると思ふ。同書は永らく雜誌に掲載されたものだが、こんど單行本になつて出た。（巴里 Alcan）

ルナチャルスキーの戯曲

ロシア共和國の第二劇場はルナチャルスキーの「宰相と鍵屋」を上演した。これはボルシエヴイキ黨の方法と思想について教へるところが多い。

グロラスクな皇帝、へいこらへいこらしてゐる宰相、日和見社會主義の議員が長い戰爭につかれた一國家を導いて行かうとする。家根裏にはマルクス派の勞働者がゐて民衆の幸福のことを夢想してゐる。そのなかに一人の鍵屋がゐる。サロンには貴族と士官共がをどつてゐる。ブルジョツ革命が第一革命として勃發した。皇帝は倒れた忠義な宰相はその機

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

牲となつて見えなくなつてしまふ。さうして社會主義者は政權をにぎると共にその本來のプログラムを放棄して軍國主義と妥合し、むかしの宮廷の人たちと遊び、シャンパンを飲んだりしてゐる。そこへ黒い衣服をきて、ナポレオン的身振りで獨裁政治家が現れる。それが正しくもとの國會議員だ。——これがケレンスキーと思はれてゐるのだが——これがヂヷンに落ちついてゐると、そこへブランデンブルグ風の將軍が狂氣ぢみた音樂の節奏につれて滑稽さうに進んでゐる。このとき、さきの錢屋の子供達とその友人と仲間共が共產主義革命を起す。銃聲や、市街戰だ、それから無產階級の勝利なのだ。さうして共產主義が勝利を得て支配權をにぎる。皇帝と社會主義國會議會は無一物になつて漂流の旅に出るもとのコケツトが赤色ロシアから來て二人の間に座つて、もとの友達のことや、自分がこれより睨んで來たことを物語る。こゝいら邊にカメレオン的共產主義者の諷刺がある。このそばに古い宰相がその子供の死を悲んでゐるだがこのむかしの世界は死に際にもだえてゐる。テラスの奥で、日に赤い旗がひるがへつてゐる。勞働者が通つてゆく……。

スペインの反動政策

各國の反動政策はその極點に到たらうとしてゐる。スペインも、その中にもれない一つだ。スペインの主義者壓迫は昨年の十一月頃から漸く熾烈になつて來たが、十二月中はことに眼もあてられぬ有樣のやうである。僕たちはその犧牲者一々の氏名を玆に擧けぬが、その多くは盡く危險と目さるるサンヂカリストである。十一月三十日フエレイの監獄に繫がれの身となつてゐたサンヂカリストは我慢し切れずに動亂の擧に出でたが、軍隊の出動があつて鎭壓された。その附近の住人は受難者たちの聞くに堪ゐぬうめき聲を耳にしたさうであるが、その後の經過を知る者がない。そしてスペイン政府は監獄の內狀を密告するものを容赦なくやつつけてゐるらしい。ヴアランスの監獄では、とうとうやり切れなくなつて、絕食同盟を開始したとある。それ以來マドリド始め罷業がつぎつぎに起きてゐる。何んといふ淺ましいザリズムだらう。僕たちの頭上にもその日が近づいた。……

四月號のため

反動政府の白色恐怖主義に對して僕たちは取敢へず別頁に於て世界の同士に訴へてゐる通りであるが、更らに僕たちは來月號に於て、奮戰するつもりである。今回は締切後の取締案提出であつたために充分に紙面を活躍することの出來なかつたことを遺憾とする。加之四月は民族の解放にとつてもまた產兒制限問題にとつても意義ある月である。僕たちは四月號を以てこれの諸問題に僕たちの明確なる解決を與ふ可きポレミツクの雜誌にしたい、戰闘の雜誌にしたい、幸に僕たちの擧を愍んにするため振つてザリズムの惡法に反抗する投稿あれ追て締切期日は今月限り三月九日とする。

地方欄

小田原の春

薄曇りした春の日曜日の午後、P——はフラリと家を出て、街の中をブラツイた。そこで彼は高價な樂器の數々が、店頭に並べてあるのを見た。

『あのピアノが自分のものになるのは何時の事だらう』と、彼は思つた。『先づ、永久に手に入らないのではないか』と思ふと、彼は又しても、自分がプロレタリアであることを痛感した。

氣紛れ半分に、彼はB——の美術展覧會へ入つて、精巧な繪畫と、大理石その他の彫刻を見た。が、その中のどの一つも、彼の氣分とは合はなかつた。彼はそれを尤もなことだと思つた。それらは皆、ブルジョアの御用に造られたものであつたのだ。何百圓、何千圓などする畫や彫刻は、買ひたくつても買へないのだから、氣持の合はないのは何うでも好かつたが、見てやつた丈時間を損した樣な氣がした。

會場を出た彼は、そこで美しく華やかに着飾つた多くの不生產消費專門階級者を觀た。『美しい着物の所有者よ』と彼は心に叫んだ——『盜みをやらない限り、俺は何時になつたら、自分の嚊アにあゝ云ふ裝りをさせて步けるだらう——あゝ、窓外は春だ』そして、彼は冬であつた。彼は自分にも春が來て好い筈だと思つた。

斯うして彼はフラリと、ブタ小屋の樣な自分の住居に歸つた。

『あゝ、腹がへつた！』

斯う云ひながら、彼はそこへ細君が持つて來た膳に向つた。途中で蒲燒の匂ひを嗅がされて來た彼には、乾物に澤庵の食卓は、馬鹿に貧しく見えた。

『吾々を斯う云ふ不幸から救ふ爲めに、政治がある筈だ』と彼は、ボロ／＼した飯を頬張りながら、滔々と考へた。併し、それは矢張り、ブルジョアの爲めに造られたものだと思つた時、彼は思はず、

『これで好いのか』と、獨言つた。

『おみをつけの餘りならまだありますが』と、細君が言つた。

『馬鹿ッ、併し、まあ、俺達の爲めに殘されて居るものはそんなものだ——科學でも、宗教でも、藝術でも、教育でも、道德でも、產業でも、銀行會社でも、俺達の役に立つものは一つもありやしない』

『何を云つてるんです、をかしな人ね』と細君が云つた。

『ウ、窓外は春だつてことよ』

彼は自分の前に强制的な權威を以て橫へられて居る陰鬱な奴隸的勞働を思ひながら、忌々しげに斯う云つた。（光造生）

軍人樣の危險思想取締と危險稅金流行

◇

堺老人の年賀狀に依ると一休和尚が『あゝ世は末だ』と言つてゐる。道理で世の中が、とんと變つたものである。

吉田奈良丸を高等官待遇にして民力休養とかを圖つたのと相對して、床次竹次郎君の二

大事業と稱せられてゐる、常にダンビラヤドスを振り翳して民衆を脅威してゐた國粹會や大和民勞會が普選斷行のビラを撒いたりする時節となつた。最も床次君が國粹會や民勞會を組織した時、同君の眼の前で神戸の某親分が尻を捲つて啖呵を切つた程で、東京にしろ大阪にしろ京都にしろ、神妙にお上の提灯持をして居る連中と全く反對の立場に立つて無産社のリーフレットをバラ撒いたりする侠客連が居るのは、床次君としては近頃大分手ぬかりである。

この床次君が軍人からも薩張り信用がないせいか、第九師團管輪内では憲兵隊が出動して危險思想を取締ると言ふ騷ぎである。石川福井、富山の三縣下に頻々と起る小作爭議、工場爭議には、この誤連中の苦い顏が警察官以上に光つて見える。

この間も、僕の居る町(石川縣大聖寺)で、陸軍憲兵中佐某々とか云ふ男が小學校の講堂で、思想善導講演會と銘を打つて一場の誤演説をやつたのは、而あてとは言へ全く人を笑はせると言ふものだ。

ところが、斯うした誤骨折に係らず、中野の電信隊や大阪の兵隊や四國の兵隊がシベリヤから赤く又黑く染つて撤兵して來たやうに誤多分に洩れず今度シベリヤから歸つて來た第九師團の兵卒諸君士官諸君は、或は赤く或は黑く染つてゐて盛んに工場へ農村へ鼓吹し宣傳し廻つて居るのは、まことに陸軍當局憲兵隊當局へ對して誤愁傷至極である。

◇

興行稅百二十圓なぞと聲くと饑餓と寒氣とに襲はれてゐるプロレタリヤ諸君はきつと厭な顏をするに違ひない。が、少し僕の言ひ分にも耳を片向けて欲しい。

この間、金澤でエスペラント語普及の爲の音樂會と講演會が二十四日と二十五日に渡つて催された。講演者の中に秋田雨雀氏があると言ふ理由で、音樂會の席上に臨官があつたり正服が入り込んだりして聽衆に反感を抱かせたと言ふ話てある。臨官に泰西の名曲が理解できたかどうかそこまで聞かなかつたのは殘念だ。

ところが、二十四日に金澤の北國劇場で獏人社小劇場の第一回試演をやつた。出演者は岸弘、矢部章夫、女屋省三、森祐次、松江靜子、小牧□子、舞臺監督が青山杉作舞臺裝置が米澤參と言ふ顏振れ。演出物は武者小路實篤『後に來る者』島村民藏「阿修羅」シング『谷の蔭』ハンキン『始終戀をしてゐる男』である。

脚本に就いての當局の干渉は脣に接吻するのはよくないから手にして呉れとか、腰を抱くのはいけないから肩を抱くのにして呉れ、とか例に依つて愚にもつかぬことばかりだ。

ところが遣つて仕舞つてから『慈善興行と認めることが出來ないから興行稅百二十圓出せ』と來た。

馬鹿にするにも程がある。この試演は金澤で蓋をあける前に大阪で二日打つて來たのだその時はそんな稅金なんてものは要らなかつた。それに會員組織になつてゐて切符はすべて臨時會員券を代用してゐる。

勿論、僕達は稅金を拂ふ程、有富ぢやない。お蔭で今以てゴテて居る。

だが、お上も大分誤利巧になつたものだ。貧乏人をいぢめるには金でいぢめるに越す良い方法がないからね！

然し諸君、その竹篦返しにどし〳〵金澤へ出て來て、誤利巧者をいぢめて呉れ給へ。

(金澤備前生)

異端者公演を見る

「バビロン塔を建設する者は先覺者である。
『そして古き塔を壞す者も又先覺者である。
『先覺者は時代の異端兒である。
『異端者の涙は常に悲しい。先覺者の血潮は常に要求されてゐる、そして酬はるるは只だ無理解の嘲罵と冷笑と迫害である。
『異端者の進む道は常に荊棘の途である。
『我等の進む途も常に荊棘の途てある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『信ずる者の爲めに、新しく生れんとする者の爲めに我等は進まねばならぬ。自ら埋草とならねばならぬ。』

斯うした宣言を發して昨年一月十六日大阪の東隅の丘高き谷町の一角に呱々の聲を上げ爾來三回の試演と一回の戯曲研究會を經て來た我が異端者は、曲りなりにも去る十四日神戸基督教青年會館に於て第一回の公演を行つてノケた。

出しモノは以下の五つであつた。

1 ダンセニー作

『忘れて來たシルクハット』

2 金子洋文作

『老 船 夫』

3 チユホフ作

『犬』

4 スートロー作

『ドン底の二人』

5 ベッケル作

『狼 火』

劇の事には全くの門外漢である自分には劇評の出來さうな筈は勿論ない。只だ自分の感じた儘を極く簡單に書くとしやう。

(1)は全く失敗であつたと自分は思つて居る。第一ベックが餘りに暗過ぎた樣だ。其の爲めに邸宅の周圍に廻した籬が牢獄のそれの樣に思はれた。登場人物に就て云ふも矢張り失敗だ。彼の氣取り過ぎた詩人のセリフは殆んど完全には聽取れなかつた。紳士ではシヤツポ、シヤツポが厭やに耳觸りになつた。

(2)は可なり力の入つたモノではあつたし亦、事實可なり良く出來てはゐたが惜しい事には船夫のセリフは餘りに低過ぎた爲め全く聽き取る事が出來なかつた。そして船夫の態度が何うも實の入つたモノの樣には見えなんだ。全體として惡い出來榮えではなかつた。

(3)は彼の位なら上出來と云つて置いても良いだらうと思ふ。少く共、彼の夜の觀客を一番多く滿足させたものだつただらうと思はれる。

(4)は出し物と云ひ登場者と云ひ本當に良いものだつた、此れだけはプロレタリアの見て置く必要のあるものだ。メリーの萩郁子は流石は鐘紡の歌劇講師をして居るだけでウマイものだ。ジヨウの三森淳も異端座の主腦者の一人であるだけに比較的スキが少ない。兎に角自分は當夜の出し物の中此の一幕を最も喜んで見た者だ。

(5)は自分には全く了解出來ないと云つた方が寧ろ適してゐるだらうと思ふ。

總體として始めての公演としては餘り見惡い程のものではなかつたと思ふ。だが猶は一層の奮勵を要する點が決して尠くなかつた。樣だ當夜は神戸基督教青年會館改築費募集と銘打つての公演ではあつたが、それにしても平素、平等だとか博愛だとかを釋く基督教の爲めの此の劇の觀覽料を一圓と二圓とに區別したのは何うしたことか?

自分は今玆で民衆劇場が何うだとか恁うだとか云はうとするのではない。何所の劇場へ行つても何時も癪に觸るのは此の觀覽料を以て上下の區別を附ける事だ。けれ共何うせは資本主義の興業者共の行つてゐる者だからと思つて今まで文句を云つた事はない。然るに何時も自由、平等博愛を口を酸くして叫んでゐる教會に於て、斯うした區別をしたのは何うした事なんだ。基督も矢張り貧乏人の味方ではないと云ふ事を露骨に表はしたのか? 意識的にか亦は無意識的にか。其れも良い場所が全部塞がつて終つたので惡い場所の人達から同じ觀覽料を貰ふのはいけない、と云ふ意味であるならばまだ少しは理窟は成り立ちもする。

けれ共左うでない事は分り切つた事だ。

現に當日だつて前の方の良い場所が未だ澤山空いてゐるのに、一圓券の人々は後ろの方の見え惡い所へ押し込められてゐたではないか? 序だから云つて置くが、少く共營利本位の興行師でない限り斯うした催しの入場料

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は常に平等にして貰ひたい。

惡い場所に居る人は氣の毒ではあるが、其れだけ時間を遲く來たのだから我慢しなければならない。少く共、我が異端座の公演の時だけでも必ず入場料均一にして貰ひたい。

放浪の旅より　第二信

（大阪にて久保田美偲）

第二信と云つた所で、大した變化のないこの町にそう變つたことのある筈はない。事實と、聞いた話を二つ許り通信する。この町から一里餘はなれた××村に酌婦が多く居るとかで、昔その道の專門の醫者がゐたそうだがそれも立退いて今では一疋の醫者も居ないので村に病人が出來ると、遂ひこの町に遙々醫者を迎へに來る。ところが、ここの醫者ときてはそれにつけ込んでまるで、ひどいことを抜かすとは誰れも云つてゐることだ。醫者なんて云ふと田舍では坊主と一緒に知識階級の部類に屬するのだが、大きな面ばかりしあがつて、その根性は動物にも劣る。ここの醫者は人を殺してもいいから金さへ取れば先づそれでいいのだ。この間も村の人があの大吹雪にも關らず醫者を迎に來たそうだが、急病人を貧乏人と見てとつたここの醫者はやつとのことで渋々出掛けたが、今死なうとしてゐる病人の枕元で、金四十圓也を眼の前で支拂はぬと、診察せぬとおどしつけたそうだ。どうせ田舍の人は死ぬ時でもないと醫者なんざ呼びはしないし、またその病人の家は、それでなくとも醫者を呼ぶ程の家柄ではなかつたのだ。伜は切めて死際に醫者に診せてやりたかつたのだが金四十圓しか一文も負からぬ、しかも今直ぐ出せとは何んと云ふひどい奴だらう。小作人の多くはこんな暗い日を重ねてゐる。人ごとではない……。

小作人と云へば、この町から一寸離れたY町にY民報と云ふ町の新聞が出來たが、その幹部と稱する（政友か憲政の陣笠のまた陣笠の手先だらう）奴共が新人を氣取つて編輯を町の若い連中に一任さしてやつた所、誰かが小作人とか地主とか云ふことを書いた。ところが、それが縣警察部高等課の問題？になり、Y町の署長は叱られる。新人の幹部がどなられるで俄かに大騒ぎ。そしてその次ぎの號の新聞記事か面白いではないか。「小作人對地主問題に就いてX君の所論を駁す」の題下で、滔々小作人は地主の恩惠によつ生きてゐる動物であることの眞理を俄かに書立てたことは地方の新聞？でなければ出來ぬ藝當だ

（東北の放浪者）

さうすると、やつぱり、わたしたち、不幸な人間同志が、手をつなぎ合つて、救はれるために最後まで戰ふよりみちのないことも考へます。

白粉を塗つてゐる美しい既婚の女達、美しい着物できらびやかに裝つてゐる女達――さうしたわたしたちの仲間が、すなはち女が、生活の爲め、結婚したのではないと言へる女が幾人あるでせうか。

わたしはこれまで書いてきて涙を見せまいとするたまらない、悲しさに突きのめされるやうな氣がします。

わたしは、わたしは、自分を救ひ得ない愚かさから、救はれなければならないとは思ひます。

わたしは弱い――けれども、土端場までゆくまでには、二つのうち、一つのみちをきめます。

墓場へ行くんぢやないと堂々と言へる自分になるやら、わたしは自身にむかつて祈ります。

誰に祈りませう。わたし自身にむかつて祈ります。此の貧しい文章に依つて、わたしに愛を持つてくれるであらう、男や女たちと共に……。（二七九頁からつゞく）

婦人欄

救はれやうとして

――潤子さんへ――

石野たい子

わたしは今結婚の墓場に入らうとしてゐます。敢てわたしは墓場と言ひます。わたしはどんなに見えない、かたちの無いものに向つて救ひを叫んだでせう。しかし、わたしは、絶對に救はれ得ないことに氣がつかないでは居られません。わたしの魂は、現實に生きることをのぞんで居りますから。見えないものに向つての、救ひを求むる叫びは、かたちのない反響より得られません。世間の同情の言葉を見限つたわたしは、絶對なものにひざまじかうとしたが、それさへわたしの魂の求めて、求めてやまないものをあたへてはくれません。わたしはいつたいどうしたらいゝのでせうか。

かういふと、誰かどきつと『お前は結婚の墓場に入らうとしてゐる』と言つたぢやないかと叱りつけるかも知れません。しかし、わたしには、止むを得ないといふ心持以上にはげしい反撥に苦んでゐる でッ。わたしは墓場と言ひました。墓場は死を意味して居ります。結婚はわたしの死です それならば、何故墓場へ行くやうな結婚を選ばなければならないか、と仰有るのですか。わたしはまだそのことに就て何も言ひませんでしたね わたしは生れつき病身な上に、最近兩親を失てつ了ひました。しかも、ながい間貧乏に苦んできたわたしが、今生活から突き離されて、肉をひさぐ女の群にも入りたくはなし、つひに選んだみちは、良人に依つて生活しようといふことなのです。けれども 今のわたしには、ほんたうの意味で結婚を要求する心持が少しもないばかりでなく、わたしの良人とならうとしてゐる男は、女の中の弱者を征服して生きてゐる度し難い人物のやうに見透かせるわたしには、また、その男に對して内心非常な反感と憎惡を感じてゐるわたしには、わしづかみにされるのをまざ／＼と見る心持でゐながらどうして運命に反抗しないでゐられませう。わたしは自分がかうした貧乏を、自分を殺す原因となつてゐると考へると同時に、かうした間違つた世の中を、金持が幸福で貧乏人が不幸な世の中を、どうにかされないものかと思ひます。さうした世の中を正しい方向へむかはせようとしてゐる人達が澤山にゐることをも考へます。わたしは迷はずには居られません。結婚の墓場へゆくのが死なら、その死を賭したなら、自分が自由に生きようとして、飢えて倒れるまで戰つて生きられないものか、たとへ病身でも、最う一歩すゝめて、世の中を正しい方向へむかはせようとする、人達のやうなことが自分にも出來ないものでせうか、……かうした世の中が出來るに就ては、創造の時には、女も大きな力となつて加つてゐたことをわたしは考へます。それならばわたしのやうなものが一人でも、精神的に加はることは、やつぱり大きな力をなす原因の一部とならないものかと考へます。どうせ、神樣に手頼つたところで救つてくれません。かたちのないものはやつぱりかたちをあたへません。そしてまた、パンを持つてゐるものはパンをあたへないのです。（二七八頁につゞく）

生活

監獄生活から見た諸名士(續)

僞電の、山中峯太郎
大法螺吹き西塚豐三郎

以前文壇に山中未醒と云つて、元が陸軍々人出の人で朝日新聞記者が居た。彼れは却々の支那通であつたので仲間からも少し御注意せられる様になつた。彼れ自身は又そう思つた。俺は新聞記者として世界的になつたと自負して柄にもない待合入りを盛んにする様になつたので、本業である方はそうなると自然御留守になる。漸々出世して築地、新橋、烏森と浮かれ歩く様になつたので御定まりの金に窮した。對手の女からは種々の問題を持ちかけられる其の方の義理をやらねば男が立たぬ。一方には以前の戀女房が待つて居るが近頃は秋風が立つたので家へ歸る事は少ない。たまたま歸れば其の昔地球上のあらゆる物を捧げますと誓つた戀女房も今頃では人目もあはれ當り散して果ては打擲すると云ふ程の變化で、當時を知る人には疑はずには居られない、然しそんな不自然の事が長く續く筈ではなく、所謂自らが招いだ自繩自縛で、昨日に變る今日のあはれな姿となつた。突發事件で監獄へ送られた。斯うなつては何んと云つても女房の他は駄目だ藝妓なんど金のある中だけだ。今となつては振り歸つてもみない。そんな事は始めから知つて居てもつい落ち込むのが凡人の常だと、斯うなつて考へたのでは少し遲い。唯だ待合遊びをして居た彼れが何んでそんな突發事件でやられたかと云ふと、此處に簡單ではあるが彼れを待合から監獄に移した大きな力があるのだ。彼れが夜となく晝となく待合淺りの揚句考へたのは、最後の手段として金儲けだ、其の金儲けと云ふのは長崎から兜町へ朝日新聞を通じて電報を打つた事だ。唯だ電報を打つた丈で何が惡いのか、當時は歐洲ではセルビヤの中學生が指先きを動かしたのが動機で指頭大のセルビヤが馬の様な大きなオーストリーハンガリーと腕押し處の騷ぎではない國を擧げて命の取りやりを始めた處へおせつかいに飛び込んだのが露西亞であつた。其の又附合に獨逸が這入る佛蘭西もと云つた具合で喧嘩は却々盛んであつたので少し離れて居た佛蘭西を獨逸が手を出して張りたほ相とした時に直ぐ傍の白耳義の頭を撲つたとか云つて成行きを見て居た英國が待つて居たとばかりに獨逸其の手を引込めろとの膝詰談判であつたが獨逸は英國なんどが何んと云つた處で、愛蘭と云ふ大疾患があるではないか病身の癖に生意氣云ふなと高を括つて居た處が急に愛蘭自治と云ふ病氣が全快したので喧嘩の仲間入りする其の次手を我が日本迄も友達の英國の爲め引込まれて果ては世界の獨り歩るきをする國と云ふ國は片端から獨墺側に行くか英露佛に行くか兎に角高見の見物は免さないと云つた様な見幕で双方から秋波を送ると云ふ始末で、妙な芝居が開かれたので、御蔭を以つて東洋では青い鳥がな

くなる様な大騒ぎで、海を對手の叔父さん達は獨逸の艦が日本近くに來たと云ふ樣な事は話にして勿論夢に見ても寢覺めが悪いので臺振りをして清めねば氣が濟まない時に、場所もあらうに太平洋に獨艦現らはると云ふ片假名で二十字足らずの電報を長崎から東京朝日新聞社宛に打つたので、此の電報を受取つた方の朝日新聞社の方では直ぐに號外を發行すると云ふ騒ぎ、此の號外を見た連中は雀躍する者もあれば、青菜に鹽の連中もあつた。殊に甚しいのは非常な勢で暴騰して居た日本郵船株は憐れ漸落と變化したので、兜町附近は戰場の移轉されたかの樣な勢を來して直接の響きを受けた人達の中には首を吊るの何處かへ身體を流すのと云ふて騒ぎ出したので、驚き出したのは戰爭が飯より好きな神樣で直ぐ此の方の御使ひを聽こしめして居る人達の僞めに細目の恥を暴露して心氣一轉の機會を與へられた譯だ。其の爲めに彼れの名は浮世離れのした別天地までも登錄して僞電の山中かと直ぐに人々を諾かせる樣になつた。

彼れは別天地生活で常に私は悪い事はしないと云つて居たが、あまりによい事をした譯でもなかつたらう。それから後は見るも氣の毒であつたのは昔の戀女房であつた。其の爲めに彼女は病氣までした。それはそうと山中君は別天地生活では生臭い坊主共と心を合せる事が出來なかつたので大分苦しんだ。それは我が戀女房の關係の深い米國人ブマグトナルドと云ふ女宣教師が居たからでと柄にもない坊主共が青い意氣を吐きかけたので流石の山中君も少し弱つたらしかつた。青坊主商賣用の阿彌陀樣ばかりかついだので大切の附物である慈悲を忘れたそれでヤソだの味噌だのと押問答の末捨てる神があれば助ける神もあると云ふたとへ通り、地藏尊ならぬ御方の御情けで假の世の中へ出て今では味噌の燒き直しに骨を折つて居るとは嘘か眞か

五六年前丸の內邊に東京貿易銀行と云ふのがあつた。此の銀行は何んでも日本貿易界でなくてならない大切の銀行であつたと云ふのは當時其の銀行に專務取締役をして居たと云ふ西塚譽次郎君の云ひ草である。其の銀行の移轉問題か何かゞ元で其の銀行が取付に會つた。其の爲めに破綻したのも東京市會議員をして居た辯護士の山口憲とか云ふ男がしたのだとは是れも西塚君の云ひ草である。處で又こんな風說もある種々の問題を引起したのは西塚の細工で御手際がよくなかつたからあんな具合になつたのだと云ふ者もある。そんな事はどうでもよい。懲役二年が西塚君の猫ババの證據ではないか。と論を進めて行けばなんでもない。兎に角西塚君は體量十八貫で丈が五尺六寸餘りもある大男で四十一年の早稻田大學卒業であつて殊に有賀長雄先生の秘藏弟子だとは是れも西塚君の云ひ草だそれで西塚君は卒業後朝鮮に行つて土地を殆んど無限と云ふ程手に入れたのだが今は草刈場になつて居ると。それも死んだ伊藤公に貰つたのだと、それで玄海灘を往復する事三十何回に及んだとか。却々甘い話ばかりだ、それで監獄へ來てからも竹箒が使へない位のなまけ者であつた。大きな身體をして居て泣いてばかり居て笑ふ時には例の法螺だ、法螺でない時は大きな頭體を塵芥掃除夫で日を暮して居た。それで看守を胡麻化して居た、田舍にも何百町かの土地があるとか出獄後は何々會社を設立する爲めに今から友人が待つて居るとか、兎に角よく法螺は吹いた。成程假出獄の恩點に會つて會社を造つたが其の重役にもなつた樣だが彼れの云つた通りとは少し違つてたらしい。やはり風說は猫ババを決定めて居た金であつたらしい。こんな重役にかゝつては預金者こそよい災難だ、銀行で味を占めたので又今度會社でせしめ樣とするのかゆだんのならない世の中だよ注意すべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

瞥人

映畫界の二異端者

修三

當然民衆のものたるべき映畫が漸次ブルジョア化しつゝある樣に見える時私は幸にして風變りの、民衆の友たる、異端者の俳優を見る。人を「笑はせる」爲の喜劇役者として知られてゐるチヤアリ・チヤプリンと「子供欺し」の西部劇の俳優として有名なウイリヤム・シエクスピアーハアト、

私は嘗てチヤプがレーニンの事を批評して

と云つて居るのを讀んだ。そして先日東洋キネマに彼の「キツド」を見た。そして彼が如何なる心でレーニンを稱えたかを知つた。あの映畫のあらゆる場面は「奈落」であり、あらゆる人物は「虐げられた人々」と「虐げる人々」であつた。總ての資本家は民衆を「奈落」に追はんとし、總ての「慈善家はあの映畫に現れた樣に民衆の敵であり、すべての警官は民衆を壓迫して資本主義の桎梏に居らしめんとする事を民衆に語つたものではあるまいか。

私は彼が如何に考へて居るかを知つた。彼が孤獨の陰鬱に沈み勝ちな事の理由を知つた。私は此の氣の弱い叛逆者に云ひたい。「イザドラ・ダンカンはロシヤに入つた。君も行かないか。」と。

シエークスピア・ハアトは單純な理性を持ち、物事を早く正確に判斷する「野性の人」に扮す。私は彼の古い映畫の中に此の樣な事があつたのを記憶する。

彼は "Wolves of the Rail" では汽車强盜の Buck Andrade に扮し "Poppy girls husband" では盜賊の 'Hair-pin' Harry Dutton に扮して居る。スクリンに表れた彼は勇敢な反逆者である。私は彼をアナキストと考へて見る事がある。私は此の反逆者ハアトが映畫を通じてこう叫んで居ると思ふ事もある。

"La Propriété est le vol"—Proudon

（以上）

眞理を求むる心

秋田　越後谷鄉花

あるものが眞理なのか?
あるべきものが眞理なのか?
人々はなほ迷ひつゝある。
然し…………
あるものは眞理として、
あまりに醜く
餘りに不自然であり
餘りに不合理である。
あるものは事實である。
だが…………
それは遂に眞理ではない。
あるべき世界
其處に眞理がある。
事實は尊い
然し、眞理はより尊い、
眞理を求むる努力は、

事實を破壞し
あるものを否定しても、
只管に…………
あるべきもの
――眞理を求める。

禁止痛快

賢三

昨日はじめて、讀賣で發賣禁止を知つて驚いた。
此の驚きはいろ〳〵な意味で。
經濟的に打擊を喰ひはしないかといふこと。
大事な作品を世の中に出さなかつたことの殘念。
また、むしろ痛快な心持。
大いに、酒でも飲んで叫びたい心持。

老いたる兄弟よ

勞働者

おゝ私の兄弟よ、
おゝ私の年老ひた兄弟よ。
御前は餘りに疲れて居る。
御前は餘りに慘じめだ。
御前の身も心も、
資本主義の殘虐の下に、
蟲けらの如くに蹂躪せられた。

おゝ私の年老いた兄弟よ。
俺は御前の顏を見る度に、
生氣のない疲れ果てた、
貧困の苦痛と呪咀と憤懣との外、
何者も見出せない。
そして無限の憎惡を込めた樣な、
深くくぼんだ瞳から
陰慘な光りを放つのを見る時、
俺は資本主義の殘虐の前に、
鞭打たれ虐げられた奴隷の、
貧き生の呻き聲を聞く樣だ。

おゝ年老いた兄弟よ。
御前は昨日何と言つた。
御前にとつて此の世界中で、
たつた一人の親しいそして忠實な、
慰安者である小さな小供が、
とう〳〵俺に先立つて、
遠い〳〵極樂淨土へ、
旅立つたと言つたろう。
そうだ疲れ切つた御前には、
死は唯一の光明なのだ。
而し考へて見ろ、
あの可愛い元氣だつた子供の前に、
死より他に與ふべき、
何物の幸福もなかつたゞらうか。

金！金だ!! 只金が無かつたばつかりに、
死なゝくても宜い子供が死んだのだ。
而も金はある、藥はある。
其れは唯かゞ有り餘る程持つて居るのだ
資本家と言ふ寄生蟲は、
御前の造つた富を奪つても、
死に瀕する御前の子供に、
藥すら與へない。

おゝ年老いた私の兄弟よ。
御前は餘りに人が善い、
御前は資本主義の道德の前に、
屈從を敎ゆる思想の前に、
敬虔な信者の如くひれ臥して居る。
あきらめと言ふ無稽な、
絕望的な墳場の中に、
總てを投げ込んで
御前の悲しみを忘れようと言ふのか。

おゝ而もお前の目は何を語る、
固く結んだ唇は何を語る、
こけ落ちた頰、額のしは、
其れは何を語るのだ。
年老いた兄弟よ、
御前は餘りに疲れて居る、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御前は踏みにじられても、
起つ可き力がない。
虐げられても反抗する力さへない。
然ゝ而し俺にはある。俺にはある。
力がある。勇氣がある。

若き日の上に輝く光
俺の胸は高鳴る。

力づよい

てる子

今まで出ないとはどうしたのかと思つて居りましたら只今新聞で禁止のよし知りまして腹立たしいやら何やらでした、力づよい氣もしました益々御奮ひ下さることを願ひます。

どんなところが御氣に召さなかつたのか拜見したいものです。此ごろは雪ごもりで会津は不甲斐ないことです。

息子のなげき

秋田KY生

俺の親がやつとの事で作つた
米は誰の手に?
やつとの事でとつた
大魚は誰の口に?
やつとの事で育てた
子供は誰の爲め?
俺の親がやつとの事で
得た金の大半は税金に
さて村會で集まつたものは誰?
彼等の呑む酒は何處から?
「コラあれは皆俺らからスボッタ金だよ」
今に見て居ろ此のやせた腕に
重もい鐵槌は鳴つてるぞ!!!

暖い靡び

ケイ・アイ・セイ

夕暮の街並木、
落陽が描く其の影。
蕭然たる冬枯れのちまた
次第々々に延びて行く影。
やがて曙光は見えるだらう、
燦然たる○○の光、
この境地は語るべからず、
歌ふべきである、
靜に味ふべきである。
人生のドン底に苦しむ
いくばくかのプロレタリアートは
其の楽しい手を握るだらう
そして暖いほゝに
熱烈なキスは交はさるゝのだ。
時に哀れなブルジョアは寄て來るだらう
彼等はそれを虐げない、

（一九二三・一・二三）

學校やめて宣傳

又二郎

しん〳〵と雪の積もる北國の地で、解放の何年か前のお正月を新しい意氣込と生々しい運動とで快よく迎へました。

「勞働者」「關西勞働者」沈默し「種蒔く人」よ、願はくば健在なれ。

私は今年から學校をやめて草深い田舍で運動します。力强い同志の鞭韃を願ひます。「種

詩く人」創刊號から送つて下さい。

雜誌はこちらの方では非常に評判がよろしい。私も出來るだけ宣傳してゐます。

明日は金澤の同志に會ひに行きます。

醤油屋町から

飯田 生

昨朝御葉書落手、又やられたとの事、二月號ですか？　只かゝる雜誌は氣に喰はぬとの先入觀念から壓迫をする御役人様の心根が悲しうございます。こうして禁止につぐの禁止を以つてせらるれば必然財政上の狂ひが何うする事も出來なくなつて了ふではないでせうか？　そして發行を中止すれば彼等は厄介物除けりと喜ぶでせうが、その度毎に被政者の心に刻みつけられて行く深刻な反抗に氣附かぬのでせうか？

銚子は平穩無事です、三万の醤油屋の雇人達も何の騷ぎも致しません、然し平穩無事に二様の意味のある事をお察し下さい。

ついてですから新年號の感じを申し上げませう。實は昨夜晩く迄に讀んで了つたのです。

○特約執筆家とか云ふのが見えぬのは贊成致します。

○載せられた詩に創作に、散文に、我々は素直な熱血を直接感じます、そして何れも共通した物淒さがあります、從つて何れが拔けてゐると云ふ必要もなく、どれがつまらぬものである、と云ふ事も出來ません、一作の評は誌全體の評に等しいと云ふ事を感じてゐます、これは本號に限つた事ではありません、我が縣の房州の諸町村には、かくも自覺した者は我也と云つた青年が澤山居ます、一つ三月頃講演會でも開いて下さいませんか。

靜動——

「青年朝鮮」——日本語の朝鮮獨立運動雜誌である。自由と權能の要求以上に社會□□の方面に於ても□□□國の一日も早き出現を祈る。東京神田錦町一ノ九共社

「小作人」——當然出なければならぬものが、埼玉縣南埼玉郡綾瀨村上蓮田に出た。「私達の運動は、實に切ばつまつた運動である」これが「小作人」の主張である。

「壞人」——は新に「破壞人」となつて生れる。力强いことだ。破壞せられざることを祈る。

「勞働運動」——「精神主義と潔癖」が問題になつてゐる。からなればどちらが早いかだ。

「ナロオド」——共産主義について學ぶところが多い。

「勞働者」——早く出るやうに。

「正進」——精鋭の勢で突進してゐる。

「新日本建設社」——趣意書—露々七年と定るとなる程見越した思付だ。

「前衛」—— 程度をおろしても上げぬやうに。前衛になつてもらひたい

「社會主義研究」——題言はさがす鮮なものだ

「痛快」——當局はあまり痛快と思はぬだらう僕も左傾スキー

「高原」——二月號にゴヤの繪が多い。雜誌と思はれない。

「新天地」——大連から出てゐて、「こんな苦しいなかに教養される來る可き時代の露西亞人は何となく偉大味を期待致させますこと」などと書いてゐる。

「俳諧文」——學連句の研究見る可し。

「握手」——握手文學に囚はれぬことを。

「荒野の光」——(中村亮平著、「天野屋利兵衛」については改めて述べん。

「無名」——小じんまりになつただけ色彩が見えて來た、嬉ぶべし。東京芝三田一ノ六

「早稲田文學」——プロレタリアを奉迎せんとする本間氏の努力愛す可し。

「日本文藝」——文藝旬報改題とともに昔日の破壞氣分が更に薄げた。

「宗教と藝術」—— 宗教の厭味なく巧用なものだ。

「現代文學」——穩健なれど、念の入つたところがある。

「野良」——第二輯。虎雄の「野をひきあはす」が細く感じがいい。

「樂園」—— 創刊號、初めから終りまで、荒々しい柔かな詩がラインをなしてゐる。

「我等」——「リップスの人格主義」讀む可し。

「勞働週報」——急激に走らず週報の任務を果してもらひたい。

白樺

三月號要目（定價六十錢 送料一錢半）

わが生活と夢想　カアペンタア
ゲエテとの對話　エツケルマン
ミケランヂエロの書簡　高田博厚
出鱈目（長篇）　武者小路實篤
模倣に就て（藝術論）　河野通勢
牧師の客（短篇）　園池公致
彼の誕生（長篇）　小泉鐵
挿畫――ミレエの作品六種

發行所　東京市外澁谷三七二　白樺社

種蒔き社第一回文藝講演會

三月三日午後六時

小劇場と民衆劇……秋田雨雀

題未定……藤森成吉

同……神近市子

文壇に向つて……前田河廣一郎

詩朗讀……白鳥省吾

ロマン・ローランと民衆劇……吉江孤雁

於神田青年會館

餘興

ロマン・ローラン作 民衆劇「ダントン」第三幕

―法廷之場―

役割

判事……村松正俊
検事……平林初之輔
陪審長……棚橋貞雄
ヴアチエ……金子洋文
サン・ジュスト……松家
ビヨー・ヴレンヌ……畠山松次郎
アンリオ……鳳逸平
デムラン……松本弘二
エロー……上野虎雄
フイリポー……小牧近江
ヴエステルマン……今野賢三
フアブル……松本淳三
ダントン……佐々木孝丸

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

前號目次

發賣禁止の心理……………（題言）
三たび飢えたるロシアのために……（社論）
へんな客（小說）……………前田河廣一郞
人間派と蟻の會議（童話）……金子　洋文
理草花（童話）……ワシリイ・エロシエンコ
死と生と一緒（小說）…………細井和喜藏
煽　動（小說）……………新井　紀一
坊主の資本階級奉仕（漫畫）……柳瀨　正夢
無宗敎者の宗敎觀（評論）……三和　一男
プロレタリアの文學（評論）……吉田　金重
□批評‖世界欄‖地方欄‖婦人欄‖生活‖
聾人‖靜動‖赤籌

編輯後記

叩きつけられる度に僕達は飛躍する、再度の發賣禁止は僕達を幸した、種蒔く人は一層强くなつた。僕達は雜誌ばかりで滿足することが出來なくなつた、愈々出版をやることに決定した。その準備として社を銀座の近くにうつした、訪問の人は個人の家を訪ねないで社の方に來てほしい。火曜日の午後に來てくれると皆ゐる筈だ。普通の日でも午後には誰かがきつとゐるから、電話なり、直接訪問なりして援助してほしい編輯及び事務のことは、主として賢三にやつて貰ふことにした。三月三日午後六時から神田靑年會館で文藝講演會を開く、僕達はその準備のために忙殺されてゐる。同人總出のロマン・ロランのダントン劇は方々から期待されてゐるが、僕達は最も新らしい最も元氣な演出をして見せるつもりだ、毎晩稽古を勵んでゐる、秋田雨雀氏から時々見てもらつてゐる。皆觀に來てほしい。

種蒔く人　第二年第二卷第六號　（大正十年十二月一日第三種郵便物認可）　大正十一年二月二十六日印刷納本　大正十一年三月一日發行

定價　一部四拾錢□半年前金貳圓四拾錢□一年前金四圓六拾錢御註文はすべて前金のこと□代金の領收は雜誌發送を以てする□送料內國壹錢外國四錢

廣告　廣告及廣告料については直接本社宛問合せを乞ふ

宛先　寄贈、通信、購讀申込及び送金、其他本誌に關する一切の御用向書籍雜誌等の寄贈は凡て「種蒔き社」宛

締切　每月五日

大正十一年二月二十六日印刷納本
大正十一年三月　一　日發　行

東京市赤坂區溜山北町二丁目八番地
發行人編輯人
印刷人　近　江　谷　駉

東京市神田區三崎町二丁目三番地
印刷所　同　工　社

東京市京橋區弓町十六番地
發行所　種　蒔　き　社
電話　京橋四〇四三（事務）
同　六一二三（編輯）
振替口座東京五九三八七

大賣捌　東京堂　上田屋　北隆館　至誠堂　東海道

本號四十錢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

種蒔く人

第二年第二巻第六號

（大正十年十二月一日第三種郵便物認可）

大正十一年二月二十六日印刷納本
大正十一年三月一日發行

本號四十錢

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

(第三種郵便認可)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA